立山町埋蔵文化財分布調査報告IV

1988年度

付:稚児塚古墳測量調査成果の考察 東大寺領大荆荘域分布調査成果の考察

> 立 山 町 教 育 委 員 会 富山大学人文学部考古学研究室 1989年3月

立山町埋蔵文化財分布調査報告IV

1988年度

付:稚児塚古墳測量調査成果の考察 東大寺領大荆荘域分布調査成果の考察

立 山 町 教 育 委 員 会 富山大学人文学部考古学研究室

1989年3月

霊峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の 生活の場として、また立山禅定に代表される信仰の場 として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これ らの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこう としています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され,文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

立山町教育委員会 教育長 坂 井 市 郎

例 言

- 1 本書は、立山町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査 の第4年度(1988年度)の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成しこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山 大学考古学研究室の全員が協力しておこなった。
- 4 本文は、宇野隆夫(富山大学人文学部助教授)、森秀典、田島富慈美(富山大学 大学院人文科学研究科学生)、清水孝之、長谷川健一、山本慎子(富山大学人文学 部考古学専攻学生)が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。
- 5 注は章末に一括し,通し番号を付して示した。本文のルビ数字は,この注番号である。
- 6 遺物番号は図版ごとに通し番号を付した。実測図版と写真図版の対照を図版下に示し、実測図と写真の番号を統一している。
- 7 本書には、分布調査以前に採集・発掘された未報告の資料を出来る限り収録した。 その区別は本文中に示し、遺物の散布状態として示す数値からは除いている。
- 8 本書には、分布調査採集品についての分析に加えて、稚児塚古墳測量調査成果の 考察として第3章北陸における大型円墳の規模とその意義、及び東大寺領大荆荘域 分布調査成果の考察として第4章東大寺領大荆荘をめぐって、をあわせ収録した。
- 9 編集は秋山進午、宇野隆夫と森秀典が協力しておこなった。
- 10 本書の作成にあたっては、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏、小島俊彰氏、田嶋明人氏をはじめとする方々から多くの貴重な御教示をうけた。また石器の石材は、富山大学教養部教授藤井昭二氏に鑑定していただいた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章	はじめに	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		1
2 調査 3 立山	町の地勢と自然環境 …	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		1 1 2 6
第2章	分布調査の成果…	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		7
1 遺跡	下と採集遺物	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		7
(1) 泉禧	 鐵留遺跡	7 (16)	若宮 B 遺跡 ······ 15	
(2) 寺日	日川嶋遺跡	7 (17)	辻遺跡 17	
(3) 寺日	日正沼遺跡	8 (18)	辻宮下遺跡 18	
(4) 泉门	「役遺跡	8 (19)	辻向田遺跡19	
(5) 浦日	日柳町遺跡	8 (20)	辻坂の上遺跡20	
(6) 大明	月神経塚	9 (21)	高原橋場遺跡20	
(7) 浦日	日遺跡	9 (22)	高原早稲田遺跡 21	
(8) 浦日	目前田遺跡	10 (23)	高原諏訪遺跡21	
(9) 稚児	見塚古墳	11 (24)	高原念仏塚遺跡 22	
(10) 若木	木階子田遺跡	12 (25)	高原下大門遺跡 23	
(11) 若木	木大丸遺跡	13 (26)	上女川新遺跡24	
(12) 寺日	目三十苅遺跡	13 (27)	下女川新遺跡24	
(13) 寺日	∃越前遺跡	14 (28)	野町遺跡 25	
(14) 若木	木経塚	14 (29)	野口新亀沢遺跡25	
(15) 若宮	F A 遺跡	15 (30)	大祖里神社前遺跡 26	
2 遺物	7の散布状態			27
	て時代遺物の散布状態		中世遺物の散布状態 34	
	・古墳時代遺物の散布状態		近世遺物の散布状態 34	
	遺物の散布状態		遺物の散布について 34	
第3章	北陸における士刑		1模とその意義	36
かり干	可にものりる人生	I Jr只 Y Z ZZ	山大 こ く ソ 心 我	50
第4章	東大寺領大荆荘を	めぐって		49
第5章	おわりに			60

図版目次

		関連頁
図版 1	Ⅳ 地区航空写真(1) 1988年撮影	·11 · 12
図版 2	Ⅳ 地区航空写真(2) 1969年撮影	·11 · 12
図版 3	稚児塚古墳航空写真『富山県史』から	·11 · 12
図版 4	稚児塚古墳墳丘写真(1) · · · · 宇野撮影 · · · · 宇野撮影 · · · ·	·11 · 12
図版 5	稚児塚古墳墳丘写真(2) · · · · 宇野撮影 · · · · · 宇野撮影 · · · ·	·11 · 12
図版 6	稚児塚古墳墳丘測量図 田島製図	·11 · 12
図版 7	遺物実測図(1)	· 7 ~17
図版 8	遺物実測図(2) 山本製図	·17~21
図版 9	遺物実測図(3)	·21~24
図版10	遺物実測図(4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	·24~27
図版11	遺物写真(1)森・清水撮影	· 7 ~17
図版12	遺物写真(2)森・山本撮影	·17~21
図版13	遺物写真(3) 森・長谷川撮影	·21~24
図版14	遺物写真(4) · · · · · 森·長谷川撮影· · · ·	·24~27
図版15	Ⅳ地区の遺跡と遺物採集地点 字野・森作成	· 7 ~ 35

插図目次

第1図	立山町の気候・植物帯の垂直変化『立山町史』から 2
第2図	立山町西部の地勢 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第3図	Ⅳ 地区図 …
第4図	Ⅳ 地区の地区割 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第5図	調査参加者 森撮影 6
第6図	Ⅳ 地区縄文時代遺物の散布状態 字野・清水作成29
第7図	Ⅳ 地区弥生・古墳時代遺物の散布状態 字野・清水作成30
第8図	Ⅳ 地区古代遺物の散布状態 宇野・清水作成31
第9図	Ⅳ 地区中世遺物の散布状態 宇野・清水作成32
第10図	Ⅳ 地区近世遺物の散布状態 字野・清水作成33
第11図	北陸における円墳の規模と外部施設 田島作成40
第12図	若狭・越前・加賀の円墳の規模と外部施設 田島作成42
第13図	能登・越中の円墳の規模と外部施設 田島作成43
第14図	越中国新川郡大藪開田地図 字野作成50
第15図	越中国新川郡大荆村墾田幷野地図 字野作成51
第16図	大荆荘比定地付近の字名 字野作成52
第17図	古代遺物の散布状態と東大寺領大荆荘比定地 宇野作成54
第18図	大荆荘比定地付近の古代遺跡55
	表目次
公1 丰	北陸古墳時代の円墳一覧 田島作成37
第1表	
第2表	各遺跡の時代別遺物散布量 字野作成53

第1章 はじめに

1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器(先土器)・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連綿と人びとの営みが続いている。

従って遺跡も多数存在しており、1972年(昭和47年)の『富山県遺跡地図』においては63個所の遺跡が登録されている。そして、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予想される。

また近年の開発行為の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査をおこなうことに決定した。

1985年(昭和60年)3月27日に、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査団を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することとなった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北 半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、5個年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し 最終的には遺跡分布図・地名表、及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定さ れた。

また調査の実施にあたっては、町域を8地区に区分し、 $I \sim V$ 地区を当面の対象地域として初年度は第I地区、第2年度は第I地区、第3年度は第I地区、第4年度の本年は第IV地区について調査をおこなった(第2図)。

現地調査は、1988年4月4日から同4月16日までの間、計13日間、延130人の参加を得て実施した。

立山町埋蔵文化財分布調査団

団 長 坂井 市郎 立山町教育委員会教育長

顧 問 岡崎 卯一 元立山町史編纂主任

安田 良栄 立山町文化財保護審議委員

調 查 団 秋山 進午 富山大学人文学部教授(調査主任)

宇野 隆夫 富山大学人文学部助教授 (調査副主任)

森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

調査補助員 田島富慈美,小田木治太郎,山嵜 典子(以上 富山大学大学院人文科学研究科学生)

押川 恵子,春日 真実,境 洋子,品川 水美,高村 幸江,田中 道子,安 英樹,

長谷川健一,金木和香子,桑名 秀徳,清水 孝之,山本 慎子

(以上 富山大学人文学部考古学研究室学生)

事 務 局 松井 哲男 立山町教育委員会社会教育課長

志鷹 敏彦 立山町教育委員会社会教育課庶務係長

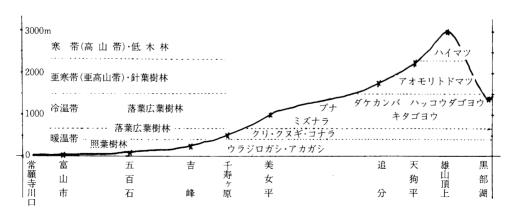
石原多喜子 立山町教育委員会社会教育課主任

森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

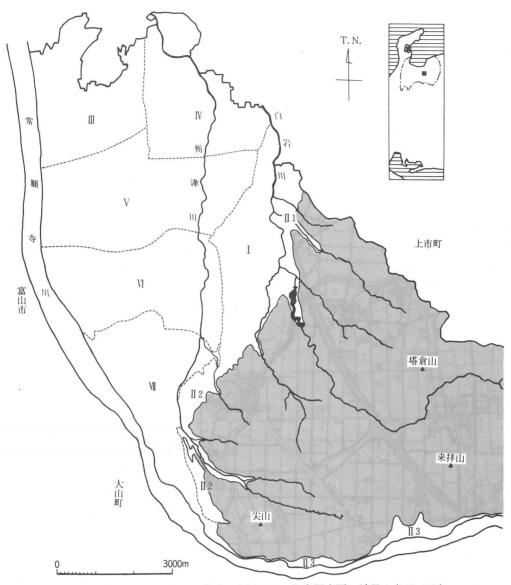
3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く延びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308kmを測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された 三角洲(デルタ)地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの 距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に延び、扇頂



第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化(『立山町史』から)



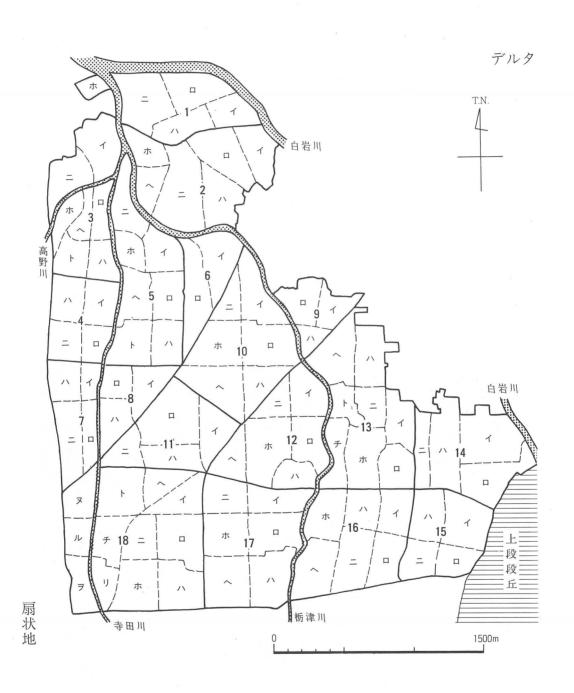
第2図 立山町西部の地勢(Ⅳ地区が1988年度調査区,縮尺1/100,000)

部の岩峅寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる(第2図)。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3,000mの山脈へと続く。これが立山連峰であり、ここには氷河地形の圏谷(カール)や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴う複雑な動物相も存在する(第1図)。



第3図 Ⅳ地区図(縮尺1/27,000)



第4図 Ⅳ地区の地区割(縮尺1/27,000)

4 1988年度調査地区の地勢と地区割

今回の調査地区は、立山町の東北部、新川地区東部及び高野地区北部である。

この地区の地形は、栃津川と白岩川が形成した扇状地の扇央近くから扇端部に至る部分と、 デルタの湧水地帯とからなっている。また微地形についてみるならば、調査区西部は寺田川な どの小河川によって開析された小支谷が多く、北部はデルタ地形となっている。

従来この地区で知られていた遺跡は、高原(縄文)・浦田(弥生)・辻(古墳)の各時代の集落跡と稚児塚古墳など少数にすぎなかったが、近年の開発に伴う発掘調査が急増し、またそれにより各遺跡の内容が徐々に明らかになってくるにつれて、この地区が弥生時代以降における新川郡の開発拠点の一つであった可能性が高まってきた。しかしながら、確認された遺跡の数は未だ少なく、ほ場整備が早くから進行したこともあって、その破壊・消滅が心配されていた。

現在は、調査地区のほとんど全てが水田等の耕作地、又は宅地となっている。また当地区は 高速道路などによる交通の便が良く、近年特に開発行為の多い地区である。このため、早急な 分布調査が望まれていた。

調査は、全体を地形・水路・道路などによって18地区に大別し、さらに97の小地区に細別して実施した。 (森秀典)



第5図 調査参加者 (稚児塚古墳にて)

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 泉蔵留遺跡 (図版15の1,注①) 立山町泉字蔵留・乗田

遺跡は、白岩川と栃津川の合流点の扇状地微高地上に立地し、県道柿沢・泉線の東北側沿いに所在する。標高は約13mを測り、規模は東西約200m、南北約200mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡である。

採集した遺物は、弥生~古墳時代の土器 5 片、古代の須恵器杯 B 蓋11片・杯 B 身 2 片・杯 4 片・壺 3 片・甕 4 片(計24片)、中世の土師器皿 5 片・珠洲甕 6 片・すり鉢 1 片(計12片)、近世の越中瀬戸椀 3 片・皿 5 片・壺 2 片・伊万里系皿 1 片(計11片)、総計52片である。これらのうち 2 点を図示した(図版 7 の 4・5)。

図版7の4は鍔状陶製品であり、竈の用具として使用されたものであろう。復原口径は約22cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は緻密で少量の黒色粒を含む。近世のものであろう。

5 は越中瀬戸皿の底部破片である。高台は削り出しており、断面は三角形をなす。色調は赤褐色を呈し、内面の上部に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内面と外面の上部に轆轤回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

以上、本遺跡の採集遺物は弥生時代から近世・近代に至るものであり、扇状地扇端部の利用が盛んであったことを示している。なお遺跡は現在水田として利用されている。

本遺跡は(2)~(4)・(13)・(13)の遺跡とあわせて,東大寺領大荆荘比定地にあたるため,第 4 章で別に考察を加える。

(2) **寺田川嶋遺跡**(図版15の2)立山町寺田字川嶋

遺跡は、白岩川と栃津川の合流点の扇状地微高地上に立地し、栃津川北岸に所在する。標高は約15mを測り、規模は東西約200m、南北約350mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、本遺跡より北東約200mの地点に泉蔵留遺跡が、北西約200mの地点に寺田正沼遺跡が所在する。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 2 片、弥生~古墳時代の土器 4 片、古代の須恵器杯 B 蓋 1 片・杯 B 身 1 片・杯 1 片・壺 1 片・甕 2 片・器種不明 4 片(計10片)、中世の土師器皿 1 片・珠洲甕 2 片(計 3 片)、近世の越中瀬戸皿 2 片・壺 2 片・すり鉢 1 片・伊万里系器種不明 1 片(計 6 片)、時期不明の土師器器種不明 1 片、総計26片である。

以上,本遺跡の採集遺物は縄文時代から近世・近代に至るものであり,扇状地扇端部の利用が盛んであったことを示している。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(3) 寺田下沼遺跡(図版15の3) 立山町寺田字正沼

遺跡は、白岩川と栃津川の合流点の扇状地上、栃津川東約250m、富山地方鉄道南約100mの地点に立地する。標高は約14mを測り、規模は東西約200m、南北約150mに及ぶものと推定する。本遺跡より東約300mの地点に泉蔵留遺跡、南東約200mの地点に寺田川嶋遺跡が立地する。

本遺跡は今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、弥生~古墳時代の土器6片、古代の土師器杯3片・椀1片・甕2片・須恵器杯B蓋1片・杯B身1片・杯A1片・杯11片・壺4片・甕7片(計31片)、中世の土師器皿9片・珠洲甕10片・すり鉢1片・壺1片(計21片)、近世の越中瀬戸椀6片・皿6片・壺12片・すり鉢1片・管状陶錘1点・灯明台1片・伊万里系皿2片(計29片)、総計87片である。これらのうち1点を図示した(図版7の6)。

図版 7 の 6 は完形の越中瀬戸管状陶錘である。孔径 2 cm, 外径 4 cm を測り, 重さは $48.4 \, \mathrm{g}$ である。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施す。

以上,本遺跡は泉蔵留遺跡と同様に,弥生時代以降長く続いた遺跡である。なお遺跡は現在 水田として利用されている。

(4) 泉下役遺跡 (図版15の4,注①) 立山町泉字下役

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川に寺田川・高野川という小河川が合流する地点の北東約200mの地点に立地する。標高は約11mを測り、規模は東西約200m、南北約150mに及ぶものと推定する。1972年に栃津川下流部の改修工事が行なわれた際、本遺跡より弥生時代の土錘が1点出土しているが、詳細は明らかではない。

今回の調査で採集した遺物は、古代の須恵器甕1片、中世の珠洲壺1片・竜泉窯系青磁椀1 片(計2片)、近世の越中瀬戸皿4片・椀1片・壺4片・伊万里系染付皿1片・椀1片・器種 不明1片(計12片)、総計15片である。これらのうち3点を図示した(図版7の1~3)。

図版7の1は竜泉窯系青磁椀の胴部破片である。外面には箆描き平行垂下線文,内面には片切彫りの花文を施す。釉調は淡暗緑色を呈し,胎土は緻密である。13世紀前半のものであろう。

2 は越中瀬戸の円盤状の蓋であり、復原径は約15cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。表面に重ね焼きの痕跡と自然釉が付着しているため、窯道具として使用した可能性がある。裏面には回転糸切り痕を残す。

3 は越中瀬戸皿の底部破片である。底部内外面は淡黄褐色を呈し、内外面の上部には褐色に 発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内外面ともに回転撫で調整を施し、内面には重ね焼 きの痕跡を残す。

以上、本遺跡の採集遺物は古代から近世のものであるが、細片のため遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(5) **浦田柳町遺跡** (図版15の5, 注①) 立山町浦田字柳町

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川に寺田川・高野川が合流する地点より西約150m, 富山地方鉄道本線と立山線の分岐点より東約100mの地点に立地する。標高は約10mを測り、 規模は東西約100m, 南北約150mに及ぶものと推定する。本遺跡より南西約300mの地点に浦田遺跡が立地している。本遺跡は『立山町史』に,古代の遺跡として記載されている。

今回の調査で採集した遺物は、弥生~古墳時代の土器1片、古代の土師器甕1片・須恵器甕1片(計2片)、中世の土師器皿4片、近世の椀1片・壺1片・皿1片(計3片)、時期不明の土師器1片、総計11片である。

以上,本遺跡の採集遺物は,弥生時代から近世・近代に至るものであるが,細片のため遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在水田として利用されている。 (清水孝之)

(6) 大明神経塚 (図版15の6,注①) 立山町浦田字新貝273番地

遺跡は、富山地方鉄道寺田駅の西北方、寺田駅変電所に隣接して所在する。

一帯は古くから「大明神」と呼ばれており、『浦田の由緒と名勝史蹟について』には「越中守細川氏の祈願所春日大明神社十二坊の跡なりと伝う…天正年間上杉謙信攻城、細川氏逃れて肥後に走り堂宇は火災に罹りて悉く烏有に帰せりと…」とある。現在は墓地となっているが、調査等の記録はなく、詳細は不明である。 (森秀典)

(7) 浦田遺跡 (図版15の7,注①・②・③) 立山町浦田字八郎

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部の湧水帯に位置し、栃津川に寺田川・高野川が合流する地点の西岸の微高地上に立地している。標高は約13mを測り、規模は東西約200m、南北約300mに及ぶものと推定する。

本遺跡は、1972年に家屋新築に際して、弥生時代終末期の土器片が多数出土して発見された。 しかし遺跡の詳しい実態は、近年まで不明であった。『立山町史』には、浦田靄気遺跡と記載されている。

1986・1987年に当地区に宅地造成の申請が提出されたため、立山町教育委員会が試掘と発掘調査を実施し、溝・土坑などの遺構と多数の遺物を発掘した。発掘調査の結果、弥生時代中期の土坑7基・溝2条、中~後期の溝3条、後期の土坑1基・溝3条、平安時代の掘立柱建物16棟・柱穴5基・柵3列・溝1条が検出されている。遺物としては、縄文時代後・晩期の土器、弥生時代中・後期の土器、古代の須恵器・土師器、近世の越中瀬戸等が多数出土している。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 1 片、弥生~古墳時代の甕形土器 3 片・壺形土器 1 片・器種不明30片(計34片)、古代の土師器杯 5 片・甕13片・器種不明11片・須恵器杯 B 蓋 4 片・杯 A 3 片・杯 7 片・壺 1 片・甕 7 片・黒色土器の杯 1 片(計52片)、中世の土師器 皿 7 片・珠洲甕 4 片(計11片)、近世の越中瀬戸皿 5 片・壺 2 片・すり鉢 1 片・伊万里系染付椀 1 片(計9 片)、総計107片である。これらのうち10点を図示した(図版 7 の16~25)。

図版7の16は壺形土器の肩部から口頸部にかけての破片である。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。外面には口頸部に横位の5本の櫛描き直線と、その下に若干の右下がりの刷毛目調整を施す。内面には粗い刷毛目調整を施す。弥生時代中期初め頃のものであろう。

17は土師器甕の口縁部破片であり、復原口径は約14cmを測る。口縁部は緩やかに外反する。

色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。口縁部外面には縦位の、内面には横位の刷 毛目調整を施し、横位の弱い撫で調整を施す。5~6世紀頃のものであろう。

18は土師器長甕の口縁部破片であり、復原口径は約14cmを測る。口縁部は「く」字状に外傾し、口縁端部は内側に肥厚する。色調は黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに轆轤による回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。9世紀頃のものであろう。19は土師器長甕の口縁部破片である。口縁部は「く」字状に外傾し、口縁端部は内側と上方に肥厚する。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密である。9世紀末から10世紀頃のものであろう。20・21は土師器鍋の口縁部破片である。復原口径は20が約30cm、21が約28cmを測る。20は頸部が外傾し、口縁端部は肥厚して面をなす。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに回転撫で調整を施す。21は口縁部がわずかに内彎しながら外傾し、口縁端部は内側に丸く肥厚する。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。20・21ともに10世紀頃のものであろう。

22は須恵器杯B蓋の破片であり、つまみはやや厚い宝珠形を呈する。色調は淡青灰色を呈し、 胎土は緻密である。8世紀後半頃のものであろう。

23は土師器杯の口縁部破片であり、復原口径は約12cmを測る。口縁部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁端部は内側を丸く、外側をやや鋭く仕上げる。色調は淡黄褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。9~10世紀頃のものであろう。

24は越中瀬戸壺の破片であり、復原口径は約10cmを測る。肩部は緩やかに張り、頸部は短く直立して、口縁端部は丸味を帯びる。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施し、外面の一部に黄色に発色する釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。

25は越中瀬戸すり鉢の口縁部破片である。口縁端部は丸く肥厚し、内外面に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに轆轤撫で調整を施す。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至る複合遺跡であり、特に弥生時代から古代にかけての遺物が多い。遺跡は、当地域に比定される初期荘園「大荆荘」を解明する上で、非常に重要な遺跡である。なお遺跡は現在住宅地として利用されている。

(8) 浦田前田遺跡(図版15の8)立山町浦田字前田

遺跡は、常願寺川扇状地上、寺田川の西岸に富山地方鉄道立山線を挟んで立地し、その中心に稚児塚古墳が立地する。標高は約15mを測り、規模は東西約400m、南北約350mに及ぶものと推定する。寺田川東岸には寺田越前遺跡が立地している。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、縄文時代の土器4片、弥生~古墳時代の有段口縁甕形土器1片・壺形土器3片・高杯形土器1片・器種不明19片(計24片)、古代の土師器2片・須恵器壺3片・杯1片・器種不明1片(計7片)、中世の土師器皿52片・珠洲甕3片・すり鉢2片・竜泉窯系青磁1片(計58片)、近世の越中瀬戸椀5片・皿10片・壺8片・すり鉢2片・土師器型入土製品1片(計26片)、総計119片である。これらのうち9点を図示した(図版7の7~15)。

図版7の7は胴部破片である。2条の沈線による区画帯を設け、区画帯内に磨消縄文を施す。 色調は暗褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。縄文時代後期のものであろう。

8 は高杯形土器の脚部破片である。復原脚端径は約26cmを測る。外面は緩やかに屈曲して開き、内面には小さな段がある。色調は黄白色を呈し、胎土は砂粒を含む。弥生時代末頃のものであろう。

9 は有段口縁甕形土器の口縁部破片であり、復原口径は約12cmを測る。段はやや緩やかであり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。色調は暗茶褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面に横位の撫で調整を施す。弥生時代末頃のものである。

10は土師器皿であり、復原口径は約10cmを測る。口縁端部はやや鋭く仕上げる。色調は淡灰色を呈し、胎土は緻密である。内外面に撫で調整を施し、口縁部には煤が付着している。灯明皿として使用されたものと推定する。中世のものである。

11は土師器皿であり、復原口径は約9 cmを測る。口縁端部はやや鋭く仕上げる。色調は黄白色を呈し、胎土は緻密である。内外面ともに撫で調整を施す。中世のものである。

12は珠洲大甕の口縁部破片であり、復原口径は約26cmを測る。頸部は「く」字状に屈曲し、外面には頸部から口縁部にかけて、口縁部を折り返す際に使用した板状具による圧痕を残す。 色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。珠洲IV期(14世紀頃)のものである。

13は越中瀬戸壺の破片であり、復原口径は約16cmを測る。口縁端部は水平の面をなす。色調は淡黄褐色を呈し、外面には褐色に発色する薄い鉄釉を施す。胎土は砂粒を含み、内外面ともに回転撫で調整を施す。

14は越中瀬戸椀の底部破片である。高台底径は4.8cmを測る。高台の断面は方形である。色調は灰褐色を呈し、内面と外面の上部に、黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密で、高台内並びに外面には轆轤回転調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

15は越中瀬戸椀の底部破片であり、高台底径は4.4cmを測る。高台は削り出しの内反り高台である。内面と外面の上部には褐色に発色する鉄釉を施し、外面の下部と高台には薄い鉄釉を施す。胎土は砂粒を含む。外面には轆轤回転削り調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

以上,本遺跡は縄文時代から中・近世に至る複合遺跡と推定するが,弥生時代と中世の遺物が特に多い。従って円墳として富山県下最大である稚児塚古墳築造の背景を把握する上で,本遺跡は重要な位置を占めている。なお遺跡は現在水田として利用されている。 (清水孝之)

(9) 稚児塚古墳(図版15の9, 図版3~6,注①・④・⑤)立山町浦田字前田185番地

稚児塚古墳は常願寺川と白岩川が形成した扇状地扇端部の水田中に立地する。現在墳頂部には枯死した大木を祀った社が建ち、周溝西側の一部を富山地方鉄道立山線が通っている。当古墳は1907年に吉田文俊氏、1908年に坪井正五郎氏によって墳丘西南部を調査されているが、古墳に関係する遺物は出土していない。また1978年、立山町教育委員会が行なった周溝確認調査では弥生時代末頃の溝を検出し、古墳東方にこの時期の遺跡が存在することが判った。ただし

古墳に直接関係する遺物は出土しなかった。なお稚児塚古墳の築造時期については、平地に築造されていることなどから5世紀中頃、5世紀中~末頃とする二説がある。

今回の測量調査の結果,当古墳は周溝・葺石を備える円墳であり,裾部での直径は南北45.2m×東西46.0m,墳丘を囲む石列(後世のもの)からの直径は南北49.6m×東西52.0mを測ることが判明した。周溝と考え得る水田の幅は狭いところで約16m,広いところでは約23mであり,これを含めた直径は南北89.0m×東西91.4mを測る。また水田面からの比高は7.3~7.4mである。なお、墳丘・周溝は正円ではなく、西へ張り出しをもち、今後の確認調査が待たれる。

墳丘及び周溝付近からは弥生~古墳時代の土器 7 片, 古墳時代初頭の土師器 3 片, 時期不明 土師器 2 片, 時期不明須恵器 1 片, 中世の土師器 3 片, 近世の越中瀬戸椀 1 片・産地不明染付 椀 1 片, 計18片を採集し,これらのうち 2 片を図示した(図版10の9・10)。

図版10の9は墳丘東側周溝内で採集した土師器壺形土器の底部であり、底径4.0cmを測る。 色調は外面が灰白色、内面が暗灰色であり、胎土は1~2 mm大の砂粒を含み、体部内外面には 刷毛目調整を施している。古墳時代初頭のものであろう。

10は墳丘北側斜面で採集した越中瀬戸椀であり、底径5.4cmを測る。胎土は砂粒を含み、体部内外面に黒色に発色する鉄釉を施す。近世末~近代頃のものであろう。これら2点は、いずれも古墳の築造時期を示すものではなく、付近一帯に広がる浦田前田遺跡と関連するものと考え得る。なお当古墳では形象埴輪の出土が伝えられているが、今回の調査では埴輪を採集することはできなかった。また稚児塚古墳の北東約80mの水田中に、瓢塚・服部塚が存在していたが現在は破壊され水田や排水路となっている。瓢塚については周囲の出土遺物から中世以降のものである可能性が強いことが指摘されている。

稚児塚古墳は浦田前田遺跡とは密接な関わりを持つと考え得るが、古墳の築造が遺跡の盛衰とどの様に関わっているかを今後検討していく必要がある。また当古墳は富山県下最大の円墳であり、第3章において北陸の他古墳と比較して、その意義について検討することにする。

(田島富慈美)

(10) 若林階子田遺跡(図版15の10)立山町若林字階子田

遺跡は、常願寺川扇状地の微高地上に立地し、富山地方鉄道立山線の西側に所在する。寺田三十苅遺跡とは北側で隣接する。標高は約18mを測り、規模は東西約200m、南北約250mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見された遺跡であり、採集遺物は、縄文時代の土器1片、弥生~古墳時代の甕形土器1片・器種不明1片(計2片)、古代の土師器器種不明1片・須恵器杯1片(計2片)、中世の土師器皿1片・竜泉窯系青磁皿1片(計2片)、近世の越中瀬戸皿1片・壺1片(計2片)、総計9片である。これらのうち1点を図示した(図版7の33)。

図版7の33は土師器皿であり、復原口径は約9cmを測る。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面に撫で調整を施す。中世のものである。

以上のほか本遺跡の採集遺物はいずれも細片のため、遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は

現在水田として利用されている。

(11) 若林大丸遺跡 (図版15の11) 立山町若林字大丸

遺跡は、常願寺川扇状地の微高地上に立地し、新寺田変電所から南西約100mの地点に所在する。標高は約20mを測り、規模は寺田川を挟んで、東西約200m、南北約250mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、縄文時代の土器62片、古代の須恵器杯B蓋1片、中世の土師器皿3片・珠洲壺2片(計5片)、近世の越中瀬戸壺1片・器種不明2片(計3片)、総計71片である。遺物は寺田川左岸に集中する。これらのうち7点を図示した(図版7の26~31、図版10の19)。

図版7の26は深鉢の胴部破片である。外面には横位のLR縄文を施し、内面には赤色顔料を 塗布する。色調は灰白色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。縄文時代中期頃のものであろう。

27は深鉢の口縁部から胴部の破片である。復原口径は約15cmを測る。器壁は薄く、外傾しながら立ち上がる。口縁端部は半截竹管によって丸く調整し、その直下から横位のLR縄文を施す。内面は磨いている。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密である。内外面には煤が付着している。縄文時代中期頃のものであろう。

28は縄文土器深鉢の胴部破片である。器壁は厚く、外面に横位のRL縄文を施す。色調は淡 黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。外面には煤が付着している。時期は不明である。

29は縄文土器深鉢の胴部破片である。28と同一個体と推定する。器壁は厚く,外面に横位の RL縄文を施す。色調は淡黄褐色を呈し,胎土は砂粒を含む。時期は不明である。

30は縄文土器深鉢の胴部破片である。器壁は薄く、外面に横位の直前段多条の三本撚りLR縄文を施していると推定する。色調は黄褐色を呈し、胎土は緻密で繊維を含む。時期は不明である。

31は縄文土器の口縁部破片である。口縁端部に棒状具を押し当てて、小突起を作り、口縁直下に半截竹管文を廻らす。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。時期は不明である。

図版10の19は深鉢の口縁部から胴部の破片である。復原口径は約30cmを測る。器壁は厚く, 胴部は緩やかに膨らみ,頸部でややくびれ,口縁部に至って再び緩やかに張り出し,内傾する。 頸部内面に稜を持ち,更に磨いている。口縁端部は面をなし,全体的に弱いキャリパー形を呈 する。外面には横位のRL縄文を施す。色調は淡黄褐色を呈し,胎土は砂粒を含む。外面には 煤が付着している。縄文時代中期前葉~中葉のものであろう。

以上、本遺跡は縄文時代中期を主体とする遺跡であり、縄文遺跡の扇状地への進出を考える 上で重要な位置を占めている。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(12) 寺田三十 苅遺跡 (図版15の12) 立山町寺田字三十苅

遺跡は、常願寺川扇状地上に立地し、栃津川と寺田川に挟まれ、両河川の合流点の南約250mの地点に所在する。標高は約13mを測り、規模は東西約150m、南北約300mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、本遺跡から南約250mの地点に寺田越前遺跡が、

西約500mの地点に浦田遺跡が、南西約300mの地点に浦田前田遺跡が各々立地する。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 1 片、弥生~古墳時代の土器 3 片、古代の土師器甕 1 片・黒色土器皿 1 片(計 2 片)、中世の珠洲甕 2 片、近世の越中瀬戸皿 1 片・染付器種不明 1 片(計 2 片)、総計10片である。これらのうち 1 点を図示した(図版 7 の32)。

図版7の32は胴部破片である。外面には半隆起線による区画帯を設ける。内外面ともに磨耗が著しく充塡文は不明である。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。縄文時代中期前葉~中葉のものであろう。

以上、本遺跡の採集遺物はいずれも細片のため、遺跡の詳細は不明である。なお遺跡は現在 水田として利用されている。

(13) 寺田越前遺跡(図版15の13)立山町寺田字越前

遺跡は、常願寺川扇状地上、寺田川東岸に立地し、寺田集落より南約150mの地点に所在する。標高は約15mを測り、規模は東西約200m、南北約200mに及ぶものと推定する。今回の調査で新たに発見した遺跡であり、採集した遺物は、弥生~古墳時代の甕形土器1片・器種不明6片(計7片)、古代の須恵器甕1片・黒色土器器種不明1片・器種不明2片(計4片)、中世の土師器皿4片・珠洲甕3片・すり鉢2片・白瓷系甕1片(計10片)、近世の越中瀬戸椀5片・皿5片・壺4片・すり鉢2片・伊万里系染付椀1片・皿1片・染付器種不明1片(計19片)、総計40片である。これらのうち3点を図示した(図版7の34~36)。

図版7の34は有段口縁壺形土器の口縁部破片である。復原口径は約14cmを測る。口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸く収める。色調は明茶褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。内外面ともに横位の撫で調整を施す。弥生時代末頃のものであろう。

35は珠洲すり鉢の口縁部破片であり、復原口径は約32cmを測る。口縁端部は面をなして内傾し、8本の櫛描きによる波状文を施す。内面には6本のおろし目を施す。色調は暗青灰色を呈し、胎土は砂粒を含み、緻密である。珠洲V期(15世紀頃)のものである。

36は越中瀬戸椀の底部破片であり、復原高台径は約6 cmを測る。高台は削り出しであり、断面は方形を呈する。色調は明褐色を呈し、外面上部に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は砂粒をわずかに含む。底部外面には回転篦削り調整を、内面には轆轤回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

以上,本遺跡は弥生時代から近世・近代に至るまで,比較的平均して遺物を採集できる。な お遺跡は現在水田として利用されている。 (清水孝之)

(14) 若林経塚 (図版15の14) 立山町若林字経塚

遺跡は若林集落の南東約150mに所在した。同地内に「経塚」の小字名を残す。

地元の人によると、削平時に一字一石経を出土したというが、遺物・記録などが残っておらず詳細は不明である。 (森秀典)

(15) **若宮 A 遺跡** (図版15の15, 注①・⑥・⑦・⑧) 立山町若宮字宮田

遺跡は、常願寺川扇状地上、下段段丘の末端部に立地し、南北に流れる栃津川によって開析された微高地上に所在する。標高は約20mを測り、規模は若宮神社を中心に、北陸自動車道を挟んで東西約450m、南北約400mに及ぶものと推定する。

遺跡は、高速道路工事着工に伴い記録保存のため、若宮神社の東側隣接地を対象として、1976・1978年に予備調査が、1979年に発掘調査が実施された。調査の結果、遺構として縄文時代の石組炉、中世の柵・溝・土坑が検出された。遺物は縄文時代早・中期の土器・石器、古墳時代の須恵器、中世の珠洲壺・すり鉢・土師器小皿、近世の越中瀬戸などが出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生~古墳時代の土器 4 片、古代の土師器器種不明 9 片・須恵器甕 1 片(計10片)、中世の土師器皿18片、近世の越中瀬戸椀 3 片・皿 4 片・壺 7 片・すり鉢 1 片・器種不明 1 片(計16片)、総計48片である。これらのうち 1 点を図示した(図版 7 の42)。

図版7の42は越中瀬戸椀の底部破片であり、復原高台径は約7cmを測る。高台は削り出しである。色調は淡黄褐色を呈し、高台外面下部には褐色に、内面及び外面上部に黒色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密であり、外面に回転篦削り調整を施す。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至るまでの複合遺跡であり、扇状地扇端部の利用が安定して続いたことを示している。なお遺跡は現在住宅地と水田に利用されている。

(16) **若宮B遺跡** (図版15の16, 注①・⑥・⑦・⑧) 立山町若宮字南地免

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部に立地し、若宮A遺跡の北東約200mの地点に所在する。両遺跡間に湧水地があることや地山土層に違いがあるため、本遺跡は栃津川によって形成された自然堤防上に位置するものと推定する。標高は約17mを測り、規模は栃津川・北陸自動車道を挟んで、東西約300m、南北約300mに及ぶものと推定する。

本遺跡は、高速道路工事着工に伴い記録保存のため、1976年に予備調査が、1978・1979年に発掘調査が実施された。調査の結果、遺構として縄文時代の小ピット1基、古墳時代の竪穴住居2棟・土坑2基・溝2条、中世の掘立柱建物20棟・柵8列・井戸5基・溝4条などが検出された。遺物は、縄文時代中・晩期の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器・子持勾玉・有孔円板・砥石・木製品、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲・土師器小皿・砥石・ふいご羽口・鉄滓・木製品、近世の越中瀬戸などが多数出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生~古墳時代の土器 3 片、古代の土師器 1 片、中世の土師器皿12片・珠洲甕 4 片(計16片)、近世の越中瀬戸椀 2 片・皿 5 片・管状陶錘 1 片・器種不明 1 片(計 9 片)、総計29片である。これらのうち 5 点を図示した(図版 7 の37~41)。

図版7の37は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。口縁部は弱く屈曲し、口縁端部は丸く収める。色調は明茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。内外面ともに横位の撫で調整を施す。中世後期のものである。

38は越中瀬戸皿の底部破片である。高台は無く,底径は4cmを測る。底部外面には回転糸切

り痕を, 内面には重ね焼きの痕跡を残す。色調は淡黄褐色を呈し, 内面に褐色に発色する鉄釉を施す。胎土は緻密である。内外面ともに轆轤回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

39は越中瀬戸管状陶錘の小破片である。復原孔径は2cm,外径は4cmを測り,重さは0.32gである。内外面に褐色に発色する鉄釉を施し、胎土は砂粒をわずかに含む。

40は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約10cmを測る。粘土板を折り曲げて作り、口縁端部は鋭く仕上げる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含むが、精良である。 内外面ともに横位の撫で調整を施す。中世後期のものである。

41は土師器皿の口縁部破片であり、復原口径は約11cmを測る。粘土板を折り曲げて作り、口縁部は直線的に立ち上がり、やや肥厚して、口縁端部に弱い面をとる。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。13世紀頃のものである。

以上、本遺跡は縄文時代から近世・近代に至るまでの複合遺跡であるが、子持勾玉が出土していることから、古墳時代の祭祀や集落を考える上で重要な遺跡と考えられる。なお遺跡の大部分は、現在水田として利用されている。

なお今回の調査以前に、若宮A・B遺跡付近において、林十三郎氏が採集した遺物を図示した(図版8の $1\sim8$ 、図版10000)。

図版 8 の 1 は磨製石斧である。刃部約 3 分の 1 を欠損し,残存長7.5cm,最大幅4.8cm を測る。重さは5.68 g である。石材は凝灰岩である。

2 は須恵器椀の底部破片であり、復原高台径は7.2cmを測る。底部外面には回転糸切り痕を残し、矮小化した高台がつく。色調は灰青色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含む。体部内外面には、回転撫で調整を施す。10世紀中頃のものである。

3 は珠洲壺の口縁部から肩部にかけての破片であり、復原口径は約20cmを測る。口頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁端部は面を成し、外側に突出する。肩部外面には横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。珠洲Ⅲ期(13世紀後半頃)のものであろう。

4 は珠洲大甕の口縁部破片であり、復原口径は約30cmを測る。口頸部は短く、外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収める。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。内外面ともに横位の撫で調整を施す。珠洲 V 期(15世紀頃)のものであろう。

5 は珠洲大甕の口縁部から肩部の破片であり、復原口径は約30cmを測る。口縁部から肩部にかけて鋭く屈曲し、口縁部は肥厚する。口縁端部は丸く収める。肩部外面には横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は灰青色を呈し、胎土は砂粒をわずかに含むが、緻密である。口縁部内外面には、回転撫で調整を施す。珠洲Ⅱ期(13世紀前半頃)のものであるう。

6 は珠洲甕の肩部破片である。口縁部から肩部にかけて緩やかに屈曲し、頸部の下端外面に

段を持つ。肩部外面には細かい横位の平行叩きを施し、肩部内面には当て具痕を残す。色調は 青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。珠洲 I ~ II 期(12世紀後半から13世紀前半頃)のものであ ろう。

7 は珠洲甕の胴部破片である。外面には右下がりの粗い平行叩きを施し、内面には当て具痕を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密である。

8 は越中瀬戸壺の底部破片であり、復原底径は約9 cmを測る。底部外面には回転糸切り痕を残す。内外面ともに褐色に発色する鉄釉を施し、胎土は砂粒を含む。内面に、回転撫で調整を施す。

図版10の20は珠洲甕の口縁部から肩部にかけての破片であり、復原口径は約24cmを測る。口 頸部は緩やかに外反しながら立ち上がり、口縁端部はやや肥厚し、外傾しながら段を成す。肩 部外面には段が2段あり、その直下より右下がりの細かい平行叩きを施す。内面には当て具痕 を残す。色調は青灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。珠洲 I 期(12世紀後半頃)のものであろう。 (清水孝之)

(17) **辻遺跡** (図版15の17, 注②) 立山町辻字西吉原

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川東岸の小支谷によって開析された微高地上に立地し、標高は21~24mを測る。規模は東西約600m、南北約350mと推定する。

1987年に立山町教育委員会が発掘調査を行ない、その結果、弥生時代後期の住居跡と、埋葬坑らしきものを含む各種の土坑や溝、奈良時代の土坑、中世の大小2条の溝を検出した。中世の溝には祭祀的色彩の濃い遺物が多いことから、近くで何らかの祭祀を行なって一括投棄され、それが溝底に溜ったものと推測されている。

遺物は、弥生~古墳時代の壺形土器・甕形土器・高杯形土器・器台形土器・蓋形土器や、砥石などの石器・土製紡錘車、古墳時代後期から平安時代の土師器・須恵器・ふいごの羽口・砥石、中世の箸・折敷・曲物・底板・竹製容器・木製糸巻き・物指状木製品・柄・杭・部材・板碑状木製品・駒形・陽物・人形・形代・刀形や、土師器皿・中国製磁器・珠洲、他に弥生~鎌倉時代の植物遺体と、多様な遺物が出土している。

今回の調査で採集した遺物は、弥生~古墳時代の甕形土器1片・器種不明78片(計79片)、古代の土師器甕3片・須恵器杯B蓋5片・杯B身3片・杯6片・壺4片・甕13片・鉢1片(計35片)、中世の土師器皿14片・珠洲甕11片・すり鉢3片・竜泉窯系青磁椀2片(計30片)、近世の越中瀬戸椀1片・皿8片・壺9片・伊万里系染付椀1片・不明染付椀1片・型入土製品1片(計21片)、総計165片であり、そのうち11点を図示した(図版8の9~22)。

図版8の9・10は有段口縁甕形土器である。9は頸部が直立し、口縁部にかけて外反する。 色調は淡黄褐色を呈し、調整は風化のため不明である。弥生時代末頃のものである。10は内面 は横位の撫で調整、外面は刷毛目調整の後、横位の撫で調整を施す。色調は外面淡赤褐色、内 面淡褐色を呈する。 11は甕形土器の口縁部である。口縁は外反し、端部を丸く収める。色調は淡褐色を呈し、焼成は悪い。風化が著しく調整は不明である。弥生時代中期のものであろう。

12は須恵器杯Bの蓋である。口縁端部は丸く収める。色調は灰青色を呈し、内面に自然釉がかかる。内外面ともに回転撫で調整を施す。9世紀頃のものであろう。

13は須恵器杯Aである。復原口径は約11cmを測る。色調は淡青灰色を呈し、体部外面下半に自然釉がかかる。内外面に回転撫で調整を施す。8~9世紀頃のものであろう。

14は須恵器鉢である。口縁部はほぼ水平に広く面をとる。色調は青灰色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。

15は小型の土師器甕である。口縁部は「く」字状に外反し、端部は上方に屈曲する。色調は 淡褐色を呈する。調整は風化が著しく不明である。9~10世紀頃のものであろう。

16は土師器甕の口縁部の破片である。口縁端部が上方に屈曲、肥厚する。色調は淡褐色から 赤褐色を呈する。調整は不明である。10世紀頃のものであろう。

17・18は土師器皿である。17は復原口径は約9 cmを測る。色調は淡褐色を呈し、口縁部内面に煤が付着する。内外面に横位の撫で調整を施す。18は復原口径約12cmを測り、体部から口縁部にかけて内彎ぎみに立ち上がる。色調は淡褐色から赤褐色を呈し、焼成は悪く、底部は剝離して割れている。底部内外面には不定方向の撫で調整、口縁部外面には横位の撫で調整を施す。17・18とも13世紀頃のものであろう。

19は竜泉窯系青磁椀の底部である。胎土は白色、精良であり、高台内を除く全面に厚い釉がかかる。

20は珠洲大甕の破片である。口頸部は弓なりに外反しつつ一旦立ち上がり、先端が嘴状に拡張する。色調はやや黒みがかった灰青色を呈し、自然釉が外面頸部を除く内外面にかかる。頸部内外面に回転撫で調整を施している。珠洲「期(12世期後半頃)に比定できる。

21は珠洲甕の胴部破片である。色調は灰青色を呈し、胎土は黒色砂粒を多く含む。外面に平行叩き目、内面に当て具の痕跡を残す。

22は珠洲すり鉢である。口縁部は弱く屈曲し、内側に面をなす。色調は淡青色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。珠洲N期(14世紀頃)に比定できる。

以上,本遺跡は弥生時代から近世・近代にかけて長く営まれた遺跡であり,特に弥生時代から古代にかけては,当地域の中心的な遺跡のひとつであったと推定できる。なお遺跡は現在南端の一部が宅地となっているほか,ほとんどが水田として利用されている。 (山本慎子)

(18) 辻宮下遺跡 (図版15の18) 立山町辻字宮下

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻遺跡の南東約500mに立地する。標高は約27mを測り、 規模は東西約550m、南北約400mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器12片・磨製石斧1点、弥生~古墳時代の甕形 土器1片・器種不明6片(計7片)、古代の土師器甕3片・器種不明21片・須恵器杯A2片・ 杯7片・壺11片・甕16片(計60片),中世の土師器皿25片・珠洲甕15片・すり鉢9片(計49片),近世の越中瀬戸椀5片・皿11片・壺9片・すり鉢3片・伊万里系染付椀4片・器種不明1片・東海系と推定する陶器すり鉢1片・土師器型入2片・寛永通宝2点(計38片),総計167片であり、これらのうち9点を図示した(図版9の13~21)。

図版 9 の13は甕形土器の口縁部破片である。口縁部は指頭押圧によって小波状を呈する。色調は淡褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。粘土帯を外傾させて積み上げ、内面を刷毛で調整した後に撫で調整を施す。器形に縄文土器の伝統を残す弥生時代前期頃の土器であろう。

14は縄文時代の定角式磨製石斧であり、基部を欠損する。残存長約11cm, 刃部幅約6 cmを測り、重さは246.6 g である。石材は安山岩である。

15は土師器甕の口縁部破片である。「く」字状に外反し、端部は上方に肥厚する。色調は淡黄褐色を呈する。10世紀頃のものである。

16は須恵器横瓶である。色調は灰青色を呈し、内面に同心円文、外面に平行叩きの後にかき目を施す。8世紀頃のものである。

17は珠洲すり鉢である。色調は内面が灰褐色、外面は灰青色を呈する。胎土に白色粒を含む。 内外面に回転撫で調整を施した後に、内面に11条の櫛状工具でおろし目をつける。底部外面に は撫で調整を施し、轆轤回転方向は右廻りである。珠洲Ⅲ期(13世紀後半頃)のものであろう。

18は珠洲すり鉢である。口縁部が水平の面をなし、やや外方に拡張する。色調は灰青色を呈する。内外面に回転撫で調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。珠洲Ⅱ~Ⅲ期(13世紀頃)のものであろう。

19は珠洲大甕の底部破片である。色調は青灰色を呈する。内面に当て具痕を残し、外面に平行叩き調整を施す。

20は陶器すり鉢である。口縁端部が水平の面をなし内側に肥厚する。内面に8条以上の櫛で右下がりのおろし目をつける。内外面に暗褐色に発色する薄い鉄釉を施している。近世初頭の瀬戸・美濃系のすり鉢と推定する。

21は越中瀬戸皿である。内面底部に菊花文を押捺し、口縁部内外面に灰釉を施している。近世初頭のものであろう。

以上,本遺跡は縄文時代から近世に至るまで各時代にわたって,かなりの遺物を採集できることに特色がある。なお遺跡は現在西北約4分の1は集落,他は水田として利用されている。

(長谷川健一)

(19) 辻 向 田遺跡 (図版15の19) 立山町辻字向田

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻遺跡の南西約300mの地点に立地し、標高は約28mを測る。 規模は東西約400m、南北約450mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。今回の調査で 採集した遺物は、縄文土器 3 片、弥生~古墳時代の土器19片、古代の土師器杯 1 片・甕 3 片・ 器種不明 4 片・須恵器杯 B 蓋 6 片・杯身 3 片・杯 6 片・壺 7 片・甕 6 片・不明 1 片(計37片)、 中世の土師器皿8片・珠洲甕6片・すり鉢1片 (計15片),近世の越中瀬戸椀4片・皿8片・壺11片・すり鉢1片・伊万里系染付椀1片・皿1片・型入土製品1片 (計32片),総計106片であり、これらのうち7点を図示した(図版8の23~29)。

23は深鉢の口縁部破片である。色調は赤褐色を呈する。半截竹管による渦巻状の半隆起線上に、櫛状工具で連続刺突文を施す。縄文中期中葉の天神山式のものであろう。

24は深鉢体部の破片である。色調は淡褐色を呈する。上部に半截竹管による3条の半隆起線をめぐらす。縄文時代中期のものであろう。

25は珠洲すり鉢の口縁部破片である。口縁端部に面をとる。色調は淡灰青色を呈する。珠洲 【期 (12世紀後半頃) のものであろう。

26は越中瀬戸灰釉灯明皿である。内面に灰釉がかかり、外面は回転篦削り調整を施す。

27~29は越中瀬戸皿である。27は内外面に灰釉がかかる。高台は削り出して碁笥底状に仕上げる。内外面に回転撫で調整を施す。

28は底部を削り出して碁笥底状に仕上げる。体部の内外面に茶色に発色する鉄釉を施す。内面に回転撫で調整,外面に回転篦削り調整を施す。

29は内面に鉄釉がかかる。体部内外面に回転撫で調整を施し、底部は高台がなく回転糸切り痕を残す。底部内面には重ね焼きの痕跡がある。

以上,本遺跡は縄文時代から中・近世に至るまで長く続いた遺跡であるが,10口地区において古代の遺物をかなり多く採集できた。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(20) **辻坂の上遺跡** (図版15の20, 注⑥・⑦・⑧) 立山町辻字坂の上

遺跡は、栃津川左岸約600m、辻向田遺跡の西南約250mと、常願寺川扇端部のやや扇央寄りに立地する。規模は東西約200m、南北約150mと推定する。標高は約30mを測る。

1976年には、ほ場整備事業にともない、次いで1979年に北陸自動車道立山インターチェンジの建設にともなって、富山県教育委員会が3次にわたる発掘調査を実施した。その結果、縄文中期初めの土坑2基、縄文早・前・中期の土器・石器、および6世紀後半の溝4条・土坑5基、土師器壺・甕・高杯・甑・支脚、須恵器杯・高杯が出土したとされている。また縄文中期初めの土坑は炉跡の可能性があり、古墳時代の溝の内側には竪穴住居が存在したであろうことが示されている。

遺跡は現在、立山インターチェンジの料金所となっているため、分布調査では縄文時代、古代、近世の土器を各1片ずつ採集したにとどまった。

(21) **高原橋場遺跡**(図版15の21,注①)立山町高原字橋場

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川の西岸沿いに立地し、標高は約36mを測る。規模は東西約350m、南北約600mと推定する。『立山町史』には縄文時代の高原遺跡として名が挙げられているが、遺跡の詳細については充分に判っていなかった。今回の調査で採集した遺物は、縄文土器14片・石鏃1点(計15片)、弥生~古墳時代の土器7片、古代の土師器杯2片・器種

不明 8 片・須恵器杯 A 1 片・杯 B 蓋 2 片・杯 4 片・壺 4 片・甕 3 片・鉢 1 片・器種不明 1 片 (計33片),中世の土師器皿16片・珠洲甕 4 片・すり鉢 9 片 (計29片),近世の越中瀬戸椀15片・壺19片・皿16片・すり鉢 4 片・伊万里系染付椀 2 片・皿 1 片・器種不明 1 片・不明染付 1 片・刷毛手唐津 1 片・寛永通宝 1 点 (計61片),総計138片であり,これらのうち 4 点を図示した(図版 8 の30~33)。

30は石鏃である。基部をわずかに欠損し、残存長1.7cm、残存基部幅1.7cm、重さは0.9gを 測る。石材はガラス質の安山岩である。

31は珠洲壺の口縁部破片である。胎土は砂粒を含み緻密である。口縁部は外反ぎみで嘴状に突出する。色調は淡青灰色を呈する。内外面ともに、回転撫で調整を施す。頸部に指頭圧痕や撫で状の痕跡を残す部分がある。珠洲Ⅱ~Ⅲ期(13世紀頃)のものであろう。

32は「く」字状口縁をもつ珠洲甕である。色調は青灰色を呈し、外面に平行叩きをもつ。珠洲Ⅱ~Ⅲ期(13世紀頃)のものであろう。

33は越中瀬戸皿である。底部は削り出して碁笥底状に仕上げる。体部内外面に灰釉を施す。 内面は回転撫で調整,外面に回転篦削り調整を施す。

以上,本遺跡は縄文時代から近世・近代にわたる遺跡であり,時期が降るほど多くの遺物を 採集できた。なお遺跡は現在ほとんどが水田として利用されている。

(22) 高原早稲田遺跡(図版15の22)立山町高原字早稲田

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、高原橋場遺跡の東北に立地し、標高は約32mを測る。東西約100m、南北約150mの規模と推定する。今回新たに発見した遺跡である。今回の調査で採集した遺物は、弥生・古墳時代の土器 5 片、古代の須恵器杯 B 蓋 2 片・杯 B 身 1 片・杯 1 片・壺2 片 (計 5 片)、中世の珠洲甕 1 片、近世の越中瀬戸灰釉香炉 1 片・椀 4 片・壺2 片・すり鉢2 片 (計10片)、総計20片であり、これらのうち1 点を図示した(図版 8 の36)。

36は越中瀬戸無釉の壺である。口縁部は丸く収め、外側に肥厚する。色調は淡褐色を呈し、 胎土は石英粒・白色粒を多く含む。内外面に横位の撫で調整を施す。

以上,本遺跡は弥生時代から近世・近代にわたるものであるが,弥生時代~古代の遺物が主体をなす。なお遺跡は現在宅地や水田となっている。 (山本慎子)

(23) 高原諏訪遺跡 (図版15の23) 立山町高原字諏訪

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻宮下遺跡の南約350mに立地する。標高は約30mを測り、 規模は東西約380m、南北約230mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 2 片、弥生~古墳時代の甕形土器 1 片・器種不明14片(計15片),古代の土師器甕 2 片・器種不明 2 片・須恵器杯 B 蓋 3 片・杯 B 2 片・杯 A 1 片・杯 5 片・壺 5 片・甕10片・黒色土器 1 片(計31片),中世の土師器皿 3 片・珠洲甕 2 片・竜泉窯系青磁 2 片(計7 片),近世の越中瀬戸椀 8 片・皿11片・壺15片・すり鉢 4 片・伊万里系染付椀 1 片(計39片),総計94片である。これらのうち12点を図示した(図版 9 の 1 ~12)。

図版9の1は須恵器杯B蓋である。口縁端部を下方に折り曲げる。色調は暗青灰色を呈し、 内外面ともに回転撫で調整を施す。8世紀後半から9世紀頃のものであろう。

2は須恵器杯Bである。体部と底部の境よりかなり内側に断面方形の高台をつける。色調は 灰青色を呈し、内外面ともに回転撫で調整を施している。8世紀前半のものである。

3は須恵器杯Bである。高台はやや丸味を持つ。色調は内面が淡灰色、外面が暗青灰色を呈する。内外面ともに回転撫で調整を施す。8世紀後半から9世紀頃のものであろう。

4 は土師器皿である。復原口径は約10cmである。色調は淡褐色を呈する。口縁部に回転撫で調整を施し、煤が付着している。中世後期のものである。

5 は越中瀬戸皿である。内面底部に菊花文を押捺し、体部と口縁部に灰釉を施す。内外面に 回転撫で調整を施し、高台部は碁笥底状を呈する。

6 は越中瀬戸皿である。高台部は碁笥底状を呈する。内面底部にくずれた菊花文を押捺している。色調は暗赤褐色を呈し、体部口縁部は灰釉を施す。回転撫で調整を施す。

7 は越中瀬戸皿である。復原口径は約10cmである。口縁部内外面にのみ褐色に発色する鉄釉 を施している。内外面ともに回転撫で調整を施す。

8 は越中瀬戸椀である。高台を削り出し断面梯形に仕上げている。内面と体部外面に黒色に 発色する鉄釉を施す。

9は越中瀬戸皿である。高台は断面三角形で碁笥底に近い形を呈している。体部外面に褐色に発色する鉄釉を施す。

10は越中瀬戸皿である。高台は削り出して碁笥底に近い形を呈している。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

11は越中瀬戸壺である。復原口径は約8.6cmである。丸みを持つ肩に短く直立する口縁部がつく。内外面に赤褐色に発色する鉄釉を施す。内外面ともに回転撫で調整を施す。

12は越中瀬戸すり鉢である。内外面に茶色に発色する薄い鉄釉を施す。内面に密におろし目をつけ、底部外面には刷毛目状の調整を施し、外面に回転撫で調整を施す。

以上,本遺跡も辻宮下遺跡と同様に縄文時代から近世・近代に至る遺物を採集できる。なお 遺跡は現在東端が集落であるが,その他は水田として利用されている。

(24) 高原念仏塚遺跡 (図版15の24) 立山町高原字念仏塚

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川右岸に立地する。標高は約35.5mを測り、規模は東西約150m、南北約280mと推定する。なお高原早稲田遺跡と高原念仏塚遺跡は、従来、高原橋場遺跡と呼ばれていたが栃津川右岸部を分離して新設した遺跡群である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 5 片・磨製石斧 1 点, 近世の越中瀬戸椀 9 片・皿10片・壺85片・香炉 1 片 (計105片), 総計111片であり、これらのうち10点を図示した(図版 9 の26~35)。

図版9の26は深鉢の胴部破片である。渦巻状に半隆起線文を施している。色調は暗茶褐色を

呈する。縄文時代中期中葉古府式に属するものであろう。

27は深鉢の胴部破片である。縦に半截竹管による区画帯をつくり、その内部に平行線文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期前葉新崎式のものであろう。

28は深鉢の口縁部破片である。横に走る半隆起線文と縦に走る一条の沈線を施す。色調は明 褐色を呈する。縄文時代中期のものであろう。

29は深鉢の口縁部破片である。口縁端部内面は貼り付けによって肥厚し、口唇端部と内面に 沈線を施す。外面は棒状工具による沈線が縦に一条走る。色調は内面が黄褐色、外面が赤褐色 を呈する。縄文時代中期後葉のものであろう。

30は深鉢の口縁部破片であろう。口縁端部を肥厚させて内面に面をなす。外面に横位の半隆 起線文を施す。色調は淡褐色を呈する。縄文時代中期前葉のものであろう。

31は越中瀬戸壺である。復原口径は約14cmを測る。丸味を持つ肩部に短く直立する口縁部がつき、暗茶褐色に発色する鉄釉を施している。

32は越中瀬戸の無釉壺である。外面に「南」という文字を墨書している。色調は淡褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

33は越中瀬戸の無釉壺蓋である。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。頂部外面に糸切り痕を残す。

34は越中瀬戸の無釉壺である。復原口径は約10cm,復原器高は約11cmを測る。色調は赤褐色を呈する。底部外面に糸切り痕を残し体部・口縁部内外面には轆轤回転撫で調整を施す。

35は縄文時代の定角式磨製石斧である。基部の幅約7~cm,残存長約7~cmを測り,重さ169.8~gである。石材は砂岩であろう。

以上,本遺跡は縄文時代の遺物も存在するが,近世の遺物が大量に散布する。なお遺跡は現在北部が集落,その他は水田として利用されている。

(25) 高原下大門遺跡(図版15の25)立山町高原字下大門

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川右岸の高原念仏塚遺跡の南約400mに立地する。標高は約44mを測り、規模は東西約300m、南北約300mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器177片、弥生~古墳時代の土器8片、古代の 須恵器杯B蓋1片・杯1片・甕2片(計4片)、中世の土師器皿6片・珠洲甕4片・竜泉窯系 青磁椀1片(計11片)、近世の越中瀬戸椀3片・皿4片・壺4片・すり鉢1片・器種不明1片・ 伊万里系染付椀3片・唐津鉢1片(計17片)、総計217片である。これらのうち4点を図示した (図版9の22~25)。

図版9の22は深鉢の胴部破片であろう。半截竹管によって渦巻文か「J」字状文をつくり、 櫛状工具による2段の刺突列点文を施す。色調は暗褐色を呈する。縄文時代中期中葉古府式に 属するものであろう。 23は深鉢の胴部破片である。縦に走る半隆起線による区画帯をつくり、区画帯内を左下がりの斜行沈線で充塡する。色調は明褐色である。縄文時代中期前葉新崎式に属するものであろう。

24は深鉢の口縁部であろう。口縁に1条の沈線を横走させる。色調は赤褐色を呈する。縄文 時代後期のものである。

25は土師器皿である。口縁部の内外面に横位の撫でを施し、端部を鋭く仕上げる。色調は赤 褐色を呈する。中世後期のものである。

以上,本遺跡は縄文時代から近世・近代までの遺物が散布するが,本年度調査において最も 多くの縄文土器を採集できた遺跡である。弥生時代以降の遺物の散布は少ない。なお遺跡は現 在,住宅地と水田として利用されている。

(26) **上女川新遺跡** (図版15の26) 立山町上女川新

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、下女川新遺跡の南西約600mに立地する。標高は約44mを測り、規模は東西約400m、南北約330mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器21片、弥生~古墳時代の土器5片、古代の土師器1片、近世の越中瀬戸椀8片・皿7片・壺5片・すり鉢1片・不明3片・伊万里系染付4片・不明染付椀1片(計29片)、総計56片である。これらのうち3点を図示した(図版10の1~3)。

図版10の1は縄文土器の浅鉢又はキャリパー状深鉢の口縁部破片である。口縁部は内側に内 彎し、口縁端を内側に折り曲げ、わずかに肥厚させる。外面に横位のRL縄文を施す。色調は 暗褐色を呈し、胎土には白色粒を含む。時期は不明である。

2 は深鉢の胴部破片である。外面に正位格子目文を施す。色調は明褐色を呈し、胎土に白色 粒と石英粒を含む。縄文時代中期前葉新崎式に属するものであろう。

3 は越中瀬戸椀である。高台は削り出しで、断面を梯形に仕上げている。内面と体部外面に 茶色を呈する鉄釉を施しているが一部は黒く発色している。

以上,本遺跡は縄文時代から近世・近代に至る遺跡であるが,調査地区の中ではやや標高が高く,縄文時代と近世の遺物が主体をなしている。なお遺跡は現在,中央部と南部が集落であり、その他は水田として利用されている。

(27) 下女川新遺跡 (図版15の27) 立山町下女川新

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、白岩川左岸に立地する。標高は約38mを測り、規模は東西約320m、南北約600mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器 2 片、弥生~古墳時代の甕形土器 8 片・器種不明 2 片(計10片),古代の土師器甕 1 片・須恵器杯 B蓋 2 片・杯 B 1 片・杯 A 2 片・杯 3 片・壺 2 片・甕 2 片(計13片),中世の土師器皿 2 片・珠洲甕 1 片(計3 片),近世の越中瀬戸椀 4 片・皿 3 片・壺 1 片・伊万里系染付椀 1 片(計9 片),総計37片である。これらのうち 3 点を図示した(図版 9 の36~38)。

図版9の36は須恵器杯B蓋である。口縁部が屈曲し端部を丸く収める。色調は灰青色を呈する。内面は回転撫で調整,頂部外面に糸切り,頂部と口縁部の境に篦削り調整を施す。9世紀後半のものである。

37は須恵器杯B身である。復原口径は約17cmを測る。口縁部はやや外反する。色調は内面が 灰青色、外面が暗灰青色を呈する。内外面とも回転撫で調整を施している。9世紀頃のもので ある。

38は越中瀬戸の皿である。高台を碁笥底状に削り出す。色調は赤褐色を呈する。内外面に回転篦削り調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。

以上、本遺跡は縄文時代から近世に至るまで若干量ずつの遺物を採集できる。なお遺跡は現在水田として利用されている。

(28) 野町遺跡 (図版15の28) 立山町野町

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、栃津川の右岸と左岸にまたがって立地する。標高は約54mを測り、規模は東西約220m、南北約180mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器19片、弥生~古墳時代の土器5片、古代の土師器2片、中世の土師器皿2片、近世の越中瀬戸椀2片・皿3片・壺3片・伊万里系染付1片(計9片)、総計37片であり、このうち1点を図示した(図版10の4)。

図版10の4は土師器高杯の脚部である。軸部がややふくらむ。色調は赤褐色を呈し、胎土に 石英粒を含んでいる。外面には縦方向の磨き調整を施す。古墳時代前期のものである。

以上,本遺跡は調査地区内では最も標高が高く,縄文時代を主として,若干量の近世に至るまでの遺物を採集できる。なお遺跡は現在東南の一部にライスセンターが建てられているがその他は水田として利用されている。 (長谷川健一)

(29) 野口新亀沢遺跡 (図版15の29) 立山町野口字新亀沢

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、辻坂の上遺跡の南約150mの地点に立地する。標高は約40mを測り、規模は東西約200m、南北約300mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文土器 1 片、弥生~古墳時代の土器13片、古代の土師器10 片・須恵器杯 A 1 片・杯 B 身 1 片・壺 6 片・甕 1 片 (計19片)、中世の土師器皿 1 片、近世の越中瀬戸皿 1 片・壺 1 片 (計 2 片)、総計36片である。これらのうち 2 点を図示した(図版 8 の34・35)。

34は須恵器杯B身である。胎土は黒色粒・白色粒を含む。色調は暗灰青色を呈する。内外面は回転撫で調整を施し、焼成は良好で堅緻である。8世紀頃のものであろう。

35は土師器長甕の口縁部片である。色調は淡黄褐色を呈し、口縁端部が屈曲、肥厚し、外面に沈線をもつ。調整は不明である。9~10世紀のものであろう。

以上,本遺跡は弥生~古墳時代を中心とする縄文時代から近世・近代にわたる遺跡と考える。 なお遺跡は現在ほとんどが水田として利用されており,一部宅地となっている。 (山本慎子)

(30) 大祖里神社前遺跡(図版15の30)立山町宮成

遺跡は、常願寺川扇状地扇端部、寺田川をまたいで立地する。標高は約53mを測り、規模は 東西約200m、南北約250mと推定する。今回新たに発見した遺跡である。

今回の調査で採集した遺物は、縄文時代の土器1片、弥生~古墳時代の土師器27片・須恵器1片(計28片)、古代の須恵器1片、中世の土師器皿1片、近世の越中瀬戸皿1片・香炉1片・伊万里系染付椀1片(計3片)、総計34片であり、このうち2点を図示した(図版10の5・6)。

図版10の5は縄文土器である。外面に半隆起線を横走させ、その上にLR縄文を施す。色調は明褐色を呈する。時期は不明である。

6は須恵器杯身である。復原口径は約14.4cmを測る。受部は外上方向に伸び先端はやや丸味を持つ。色調は黄灰色を呈し、内面と口縁部外面・体部外面の上3分の1は回転撫で調整、下3分の2は回転篦削り調整を施す。轆轤回転方向は右廻りである。陶邑TK10型式に比定でき、6世紀中頃のものであろう。

以上,本遺跡は縄文時代から近世・近代までの遺物が散布するが,調査区の標高が高い遺跡には珍らしく弥生~古墳時代の遺物が主体をなす。また常願寺川扇状地扇端部の遺跡において6世紀の資料を採集できたのは現在までのところ本遺跡のみである。なお遺跡は現在,中心やや西よりに大祖里神社と光蓮寺が存在するが,その他は水田として利用されている。

(31) その他

遺跡として設定した地区外の採集品である(図版8の37,9の39~41,10の7・8・11~18)。 図版8の37は第8ハ地区で採集した有段口縁壺形土器の口縁部破片である。色調は暗青灰色を呈し、外面に刷毛目痕を残す。古墳時代前期頃のものであろう。

図版9の39は第14ハ地区で採集した越中瀬戸の灰釉皿である。復原口径は約11cmを測る。断面三角形の高台を有し、底部内面に菊花文を押捺する。色調は赤褐色を呈し、口縁部内外面に灰釉を施す。内外面に回転篦削り調整を施し、轆轤回転方向は右廻りである。

図版 9 の40・41は第14二地区で採集したものである。40は越中瀬戸椀である。復原口径は約12cmを測る。内外面に黒色に発色する鉄釉を施す。高台を有するものであろう。

41は越中瀬戸の管状陶錘である。長さ約3.6cm, 復原孔径約1.6cm, 復原外径約4cmを測る。 内外面に茶褐色を発色する鉄釉を施す。約3分の1が残存する。

図版10の7・8 は第16二地区で採集したものである。7 は深鉢の胴部破片である。半隆起線により区画をつくり、区画内に三叉状文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期中葉天神山式に属するものである。

8 は越中瀬戸すり鉢である。復原口径約30cmを測る。口縁端部は水平の面をなす。内面に6 条のおろし目をつけ、内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。口縁部内外面と外面に回転撫で 調整を施す。

図版10の11は第17ロ地区で採集した須恵器杯B蓋である。口縁端部を下方に弱くつまみ出し

断面を三角形にしている。色調は淡灰青色を呈し、口縁部に自然釉がかかっている。内外面に 回転撫で調整を施す。9世紀頃のものである。

図版10の12・13は第17へ地区で採集したものである。12は瓦器火舎の口縁部である。口縁端部は水平のやや丸味を持つ面をなす。色調は内面が黒色、外面が灰白色を呈する。中世後期のものである。

13は越中瀬戸皿である。復原口径は約15cmを測る。口縁部内外面に茶褐色に発色する鉄釉を施す。内外面に回転撫で調整を施す。

図版10の14は第18口地区で採集した越中瀬戸の無釉管状陶錘である。長さ4.6cm,復原孔径約2.2cm,復原外径約4cmを測り,重さは17.6gである。約3分の1が残存する。

図版10の15は第14イ地区で採集した珠洲壺ないし甕の口縁部破片である。「く」字状に外反し、端部はわずかに外方に肥厚する。色調は淡灰青色を呈し、胎土に白色粒を含む。口縁内外面に回転撫で調整を施し、胴上部外面に平行叩き、内面に当て具痕を残す。轆轤回転方向は右廻りである。珠洲Ⅲ期(13世紀後半頃)のものであろう。

図版10の16~18は調査地区外の二ッ塚付近で採集したものである。16は縄文土器深鉢の胴部破片である。横位のLR縄文を施す。内部に炭化物の付着がみられる。色調は淡黄褐色を呈し、時期は不明である。

17は縄文土器深鉢の胴部破片である。縦位の撚糸文を施す。内部に炭化物の付着がみられる。 色調は暗赤褐色を呈する。時期は不明である。

18は浅鉢の口縁部破片である。復原口径は約20cmである。口縁部はほぼ垂直にたちあがり、口唇直下に棒状工具による沈線が横走する。頸部に貼り付け隆帯による渦巻文をもつ。渦巻間には沈線で方形区画をつくり、区画内は櫛状工具により刺突し擬縄文を施す。色調は明褐色を呈する。縄文時代中期中葉頃のものであろう。 (長谷川健一)

2 遺物の散布状態 (第6~10図)

1988年度の調査によって、IV地区から2517片・口縁部31.0個体分の資料を採集した。これらは縄文時代から近世に至るものであり、このうちある程度、年代を判定できた資料は、2311片・口縁部31.0個体分である。当地区は昨年調査をおこなったⅢ地区と同様に常願寺川扇状地扇端部にあたり、採集資料の構成も相似たところが多い。ただしIV地区は遺跡集中地帯である上段段丘北半部に接し、栃津川・白岩川が複合扇状地を形成しているところから、若干の相違点も生じている。まず時期別にこれらの採集品の構成と散布状態とについて示そう。

(1) 縄文時代の遺物の散布状態(第6図)

縄文時代の遺物は、土器340片・0.2個体分、石鏃1点、磨製石斧1点、総計342片・2.2個体分であり、そのほとんどが中期初め~晩期に属している。これらの資料は扇状地に広く散布するが、縄文遺跡の多い上段段丘に接する地帯においては、栃津川と白岩川に挟まれた部分に密

に散布している。特に13ホ・13チ・16ホ地区に広がる高原下大門遺跡では177片と多くの遺物を採集できた。これらの遺跡は上段段丘の縄文遺跡と一連のものとして把握できるであろう。それに対して、段丘から離れた西側の調査地区では、縄文時代の遺物はより分散的に散布している。またこれらの地区では栃津川より高位の地区におもに散布する。なお栃津川と白岩川に挟まれた地区では、標高約35m以上の地区に縄文時代遺物の散布が多いという結果を得た。

なお調査地区の西南隅に縄文時代遺物が少量散布する地点は、標高約50mと、一段高い扇状 地部分の端の地区にあたる。

(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態 (第7図)

弥生・古墳時代の遺物は,弥生土器・土師器434片・1.1個体分(甕26片・0.8個体分,壺8片・0.1個体分,高杯3片,器種不明397片・0.2個体分),須恵器杯身1片・0.1個体分,総計435片・1.2個体分を採集した。これらは弥生中期初めから古墳時代後期に至るものであるが、大多数は弥生後期以後のものである。

これらの遺物の散布状態を縄文時代と比較するならば、より低地に及んでいることが判る。また散布の中心をなす3二地区の浦田遺跡は標高約15m、9イ・ロ地区の辻遺跡は標高約20m余であり、中核的な集落そのものが上段段丘から離れて低位の湧水地帯に立地するようになった。この動きは、中位・高位段丘の縄文遺跡が放棄されることと表裏の関係をなしている。

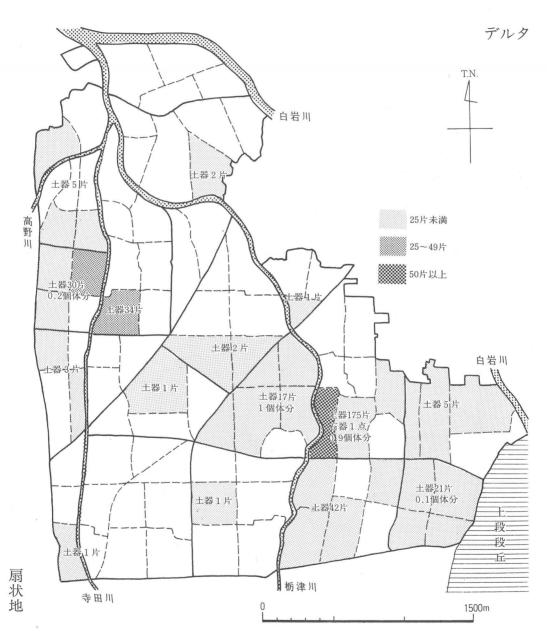
なおⅢ地区においては確実な6世紀の資料を採集できなかったが、今回は18ヲ地区から若干の資料を得た。ただしこの地区は、上段段丘に匹敵する標高約50mの地点であり、扇端部におけるこの時期の集落の存否は不明である。発掘調査によって若干の資料が出土したとの報告もあり、集落が全く途絶していたとは言えないが、衰退傾向にあった可能性が高いであろう。

(3) 古代遺物の散布状態 (第8図)

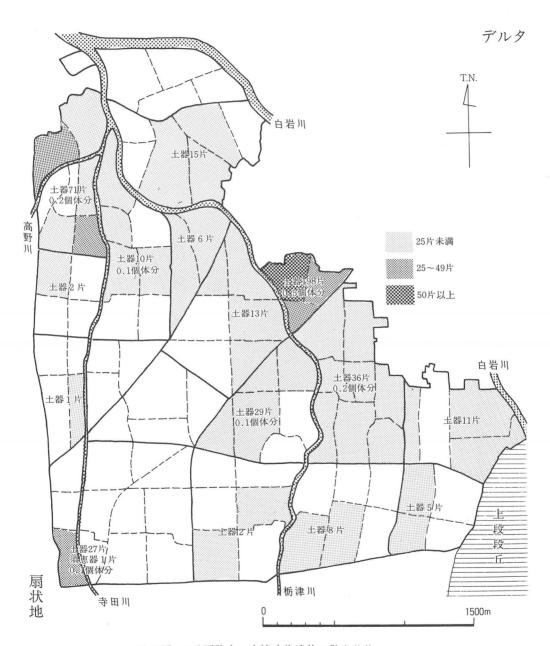
古代の遺物は、土師器121片・0.8個体分(杯 A 11片・0.1個体分、椀 B 1片、甕31片・0.6個体分、器種不明78片・0.1個体分)、黒色土器杯9片(杯 A 2片、器種不明7片)、須恵器264片・3.6個体分(杯 B 蓋41片・1.1個体分、杯 B 身17片・0.1個体分、杯 A 13片・0.1個体分、杯 B 身もしくは杯 A 67片・1.5個体分、椀 A 1片、鉢1片、壺58片・0.6個体分、甕58片・0.1個体分、器種不明8片)、総計394片・4.4個体分である。これらのほとんどは8世紀後半から9世紀にかけてのものである。8世紀前半と10世紀以後の資料は少量であり、Ⅲ・Ⅳ地区を通じて確実に7世紀と認定できる資料は得ていない。

これらの資料の散布状態は、弥生・古墳時代にほぼ等しく、扇端部に広く散布している。ただし遺物集中地点は、弥生・古墳時代以来の辻・浦田遺跡周辺に加えて、栃津川・白岩川合流点の泉・寺田地区付近と、3個所になっている。この泉・寺田地区付近は東大寺領大荆荘の比定地であり、第4章で別に検討を加えることにしたい。

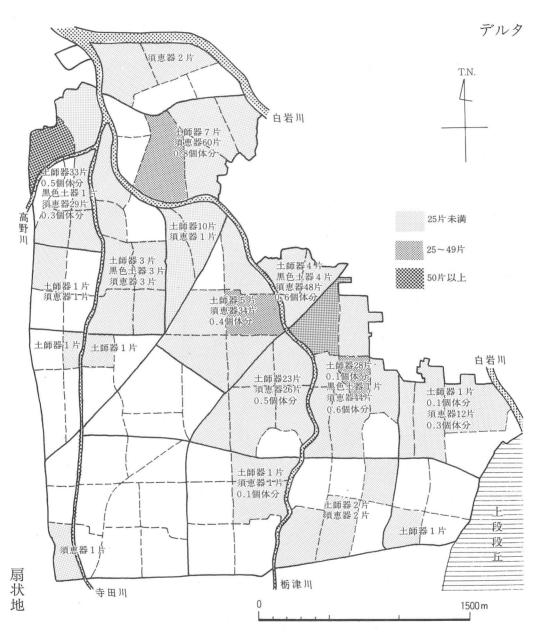
扇端部において、7世紀の遺跡が不明であること、8・9世紀に大遺跡群が形成されること、10世紀以後に集落が拡散したらしいことなどにおいて、Ⅳ地区ではⅢ地区と同様の結果を得た。



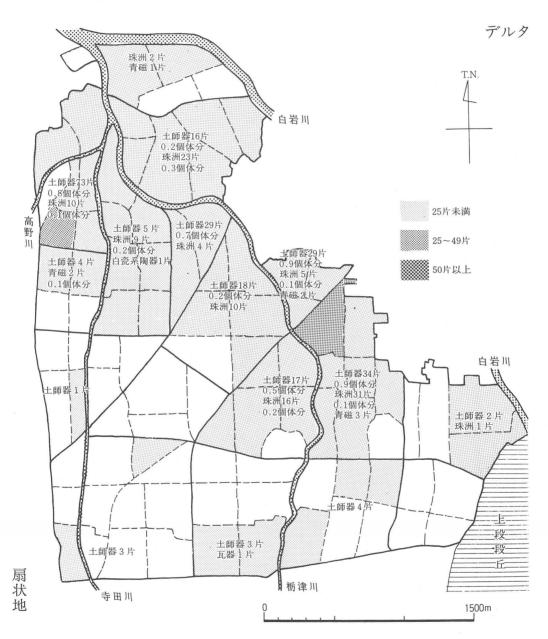
第6図 Ⅳ地区縄文時代遺物の散布状態(地区名は第4図参照)



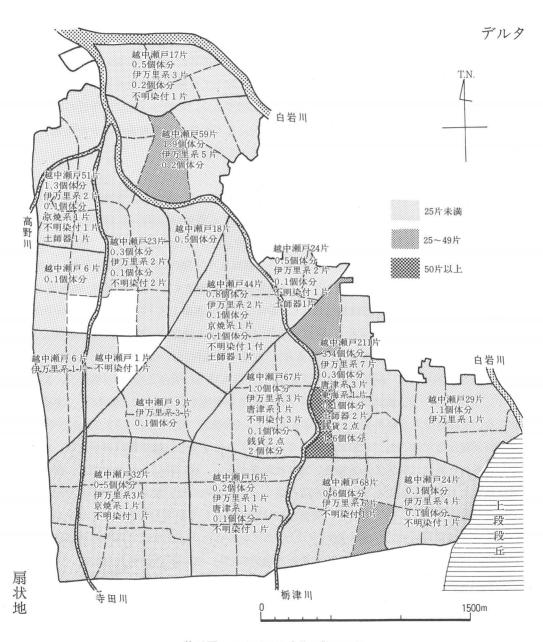
第7図 Ⅳ地区弥生・古墳時代遺物の散布状態



第8図 Ⅳ地区古代遺物の散布状態



第9図 Ⅳ地区中世遺物の散布状態



第10図 Ⅳ地区近世遺物の散布状態

(4) 中世遺物の散布状態 (第9図)

中世の遺物は、土師器237片・4.3個体分(すべて皿A)、珠洲111片・0.9個体分(すり鉢28片・0.6個体分、壺4片・0.2個体分、甕79片・0.1個体分)、白瓷系甕1片、竜泉窯系青磁9片・0.1個体分、瓦器火舎1片、総計359片・5.3個体分である。これらは中世の全般に及ぶものであるが、16世紀の資料は少ない。

散布状態はⅢ地区と同様に分散的であり、50片以上採集できた小地区はないが、古代と同様に辻・浦田遺跡付近に若干の集中地点がある。これに対して大荆荘比定地の泉・寺田遺跡付近には、遺物が散布するものの少数であることが対照的である。なお16世紀には至近の地に弓庄城が営まれ、当地はしばしば戦乱の場となる。このこととⅣ地区の遺物量の減少が関係する可能性があるが、この点については発掘例の増加をまって判断したい。

(5) 近世遺物の散布状態 (第10図)

近世の遺物は、越中瀬戸706片・12.7個体分(灰釉椀14片・0.4個体分、皿20片・1.4個体分、 壺 3 片, 香炉 5 片・0.2個体分, 器種不明 1 片, 黒く発色する鉄釉椀111片・1.2個体分, 皿 5 片・ 0.2個体分, 壺 5 片・0.1個体分, すり鉢 1 片, 蓋 1 片, 香炉 1 片・0.1個体分, 茶色に発色す る鉄釉椀28片・0.3個体分,Ⅲ132片・3.2個体分,壺34片・0.2個体分,粗製壺149片・2.4個体 分, すり鉢50片・0.2個体分, 灯明台1片・0.1個体分, 管状陶錘4片・1.4個体分, 無釉皿1片, 粗製壺105片・1.1個体分,管状陶錘1片・0.2個体分,鍔付き環1片・0.1個体分,釉不明椀3 片、皿22片、釉及び器種不明8片)、伊万里系染付47片・1.2個体分(椀23片・0.6個体分、皿 12片・0.4個体分, 器種不明12片・0.2個体分), 産地不明染付12片・0.1個体分(椀6片・0.1 個体分,器種不明6片),京焼系黄釉陶器3片・0.1個体分(灯明台2片・0.1個体分,器種不 明1片),唐津3片・0.1個体分(刷毛手鉢1片,刷毛手器種不明2点・0.1個体分),美濃系す り鉢1片,土師器型入土製品5片,寛永通宝4点・3.6個体分,総計781片・17.9個体分である。 越中瀬戸が破片数で90.9%. 口縁部で90.1%を占めて主体をなし, 越中瀬戸の中では、黒く発 色する鉄釉椀と茶色に発色する鉄釉皿、及び粗製壺が多い。椀は匣に入れて焼成し、皿は直接 重ねて焼いたものが主流である。また糸切り痕をもつ粗製の壺は、匣そのものであるが、壺と して流通したらしい。このうち無釉の粗製壺には蔵骨器として使用したものがある。なお越中 瀬戸生産地の上段段丘では,越中瀬戸がほぼ100%を占めたが,Ⅳ地区では肥前系陶磁が破片 数で6.4%, 口縁部で9.2%, 京焼系陶器が破片数で0.4%, 口縁部で0.7%存在した。

これらの資料は調査地区にほとんどくまなく散布している点で、以前とかなり様相を異にする。またこれらの中では、栃津川沿いに4個所の集中地点がある。

(6) 遺物の散布について

本調査地区は、(a)低地の扇端部湧水帯(西北部)、(b)上段段丘に接するやや高位の扇端部(東南部)、(c)湧水帯より高位の扇状地部分(西南部)、という3つの部分から成っている。(a)の地区においてはIII地区の北部と同様に、弥生時代以来、現代に至るまでの遺跡が多く営まれてい

る。(b)の地区では、より古く縄文時代中期以後、現代に及ぶ遺跡が存在するが、中心的な集落は、縄文時代には(b)の地区、弥生時代~古代には(a)の地区にあり、中・近世では大きな差がない。(c)の地区は、若干の縄文時代遺物が散布した後、遺物の散布は、ごくわずかとなり、近世に至って増加する。

この流れの中での顕著な出来事は、7世紀における集落の衰退、8世紀の大規模な再開発、10世紀以後の遺跡の拡散、近世の大開発である。扇央部の開発も8世紀以後、川筋を中心として進行したと推察するが、近世の遺物散布量の急増は特筆してよいであろう。またIV地区の動きだけではそれほど目立たないが、当地域全体についてみるならば、弥生時代の開始は遺跡立地の大きな転換期であった。

なお調査地区の西南隅は、一段高い扇状地面の末端にあたり、横を寺田川が流れている。この地区からは、(c)の地区の傾向とは異なり、縄文時代から現代に至る遺物が散布する大祖里神社前遺跡と野町遺跡を発見した。この地点は立山町の中心街区である五百石が位置する扇状地面の末端にあたり、このような遺跡の存在することを予想できなかったところである。

来年度からは、この扇央部の調査にとりかかる予定である。この地区は、従来、遺跡の様相 が最も不明確であった地域であり、その開発史を知る手掛かりを得ることに努めたい。

(宇野隆夫)

〔注〕

- ① 立山町教育委員会『立山町史』上巻,1977年。
- ② 立山町教育委員会『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』立山町文化財調査報告書第3冊, 1987年。
- ③ 立山町教育委員会『浦田遺跡第2次発掘調査報告』立山町文化財調査報告書第6冊, 1988年。
- ④ 富山県『富山県史』考古編、1972年。
- ⑤ 立山町教育委員会『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』1979年。
- ⑥ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町遺構編』1981年。
- ⑦ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町土器·石器編』1982年。
- ⑧ 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告 立山町木製品・総括編』1984年。

第3章 北陸における円墳の規模とその意義

田島富慈美

古墳時代の墓制を考えるうえで、前方後円墳とそれよりはるかに数の多い円墳は、最も重要な情報を与えてくれるものである。その規模一つをとりあげても、そこに葬られた人々の社会的地位を考える重要な手掛りとなるのは言うまでもなかろう。

ただしこのような問題を具体的に明らかにするためには、墳形別、時期・地域別に古墳の規模を格付け、それが古墳の他の要素とどのような関係をもつかを検討しなければならない。

本稿は、立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室が、立山町浦田稚児家古墳、同塚越家越古墳という大・中型円墳の測量調査を実施したことを契機として、北陸古墳時代の円墳の規模とその意義について検討を加えようとするものである。そして前方後円・前方後方墳と円墳との関係にもふれて、北陸における墓制の全体像を探る第一歩としたい。

1 円墳の規模と群別 (第11図・第1表)

まず北陸における,直径20m以上の円墳を集成した(第1表)。なおここには墳丘裾に小規模な張り出しを持つものを含んでいるが,本稿ではこれらを円墳として扱い,前方部基部に匹敵する施設をもつものを帆立貝式古墳と認定している。また墳丘の変形や発掘調査を実施していない古墳の規模をどのように扱うかのような困難な問題もあるが,これらの点に留意しつつ,できる限りの分析を加えたい。

集成した円墳は計146基を数え、これらは規模による群別が可能であると考えられる(第11図)。すなわち円墳の規模の集中度合いに着目すると、 I a 群:直径60 m以上, I b 群:45 m以上60 m未満, II a 群:34 m以上45 m未満, II b 群:20 m以上34 m未満, と 4 群に大別できる。このように古墳は規模が小さくなるほど数が増加し、ここではとりあげないが,より多く存在する直径20 m未満の古墳をII 群とする。規模についてのみ見るならば, I 群が大型(I a 群が特大, I b 群が大型) II 群が中型(II a 群が中大型, II b 群が中小型),そして II 群が小型となろう。

以上の各群について、周溝・段築・葺石・埴輪の樹立という 4 項目について、それらの有無を検討した(第11図)。その結果、 I 群の大型円墳は、何らかの外部施設をもち、とくに I a 群特大型円墳は、 2 種以上の外部施設をもつものが揃うことが判った。また II 群中型円墳は外部施設をもたないものがかなりあり、 II b 群中小型の円墳では外部施設をもたないものが79.7%に達する。また III 群小型円墳は大多数のものが何らの外部施設ももたないであろう。

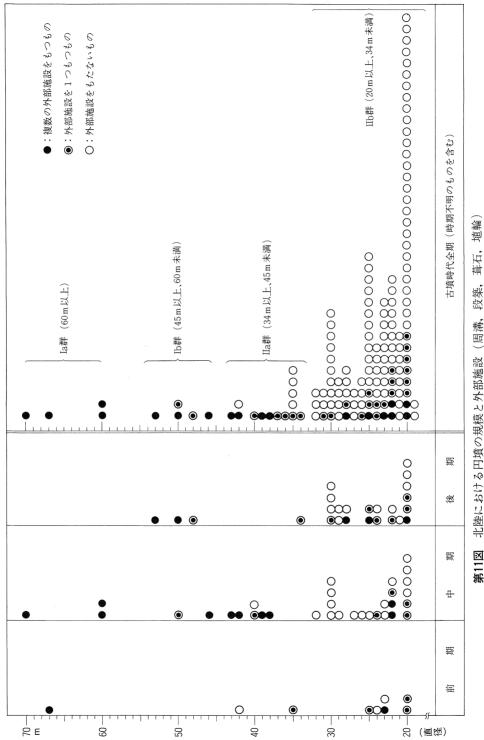
第1表 北陸古墳時代の円墳一覧

					~	光		H H	心座白墳時代の円墳-	見					
番号	古 墳 名	直径(m)	高さ(m)	立地	周溝	段築	葺石	埴輪	主体部	出土遺物	時期	調査の種類・年	年	刑	在 地
趙	争														
1	関野 2 号墳	29.5	3.2	丘陵先端	熊	無	熊	兼	木棺直葬	鉄器·玉類·土師器	5 c前半	発掘 19			小矢部市石坂
2	日中藤塚七墳	20	3.8	段后上	埔	#	埔	埔	堅穴式石室	鏡·剣·朱	中期	発掘 19	1964 28.31		中新川郡立山町日中
ା ମ	II - ボジゴベ 国外旧大培業 A 培	. 0 6%	6	上級排	単	崩	崩	崩	粘十鄉or 木棺直葬	鏡·鉄器·干類·十師器	$5c \partial^{3}$		1951 31	100	高岡市伏木国分字岩崎
•	三と日で大きにて 三十九十十年 単七十十	0.00	٠. د	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	(6		(0	(c		須事 芸術 一	60.25	※調 全	1971 31		针水割 八杉町 万米一
4 r	五七百百項中(21条 名百万七基	000		11.000年11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.11.	. 4	. Į			Ψ. 	大学記録を表して	~~ c		1000 90.91		名ならしてはイントの日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の日本の
ç,	稚児塚占墳・ゴーボ	46.2	۵. ۱	题 大 財 前 前	Æ ¢	∦ ∘	fic fi		٠. ۵	· □ 點 (1/2/火,1/4)	٠. د				新八郎 4 耳四角 76 冬 女男 4 里 4 里 5 井 7 井
9	大塚古墳	33	2~6	丘陵稼辺	× ,	× .	× .	× .		· .					別休憩人口町 市ノ井・ガー・
7	塚越古墳	35	4	扇状地末端	熊	熊	熊	巣	÷	単	٠.				中新川郡立山町塚越
∞	興法寺1号墳	30.0	5.2	台地状丘陵端	ۍ.	ç.	٠.	ç.	٠.	6.	٠.		1982 35.54		小矢部市簑輪
6	オオノントウ古墳	27.5	4.0	丘陵尾根上	٠.	۲.	۰.	<i>د</i> .	6	6	6	分調·略測 19	197? 10	÷	小矢部市田川
10	矢田卜野1号墳	27.0	6	→ 日本語画	ć	٠	¢.	¢.	大炭糖	直刀	٠		1960 31	恒	高岡市高美町
: =		24 0-28 0	۰. د	型 型 型	4-5	۰	۰	٠	6	6	6		33	10	喜图市伏木国分字岩 崎
1 5	国ンヨロ資料の適同学等の事	0.07 0.47		工家省 几縣四苗	E c	٠.	. د	٠.	٠. د		٠. د	H	1070	[-	17年17年17万万元六十八年十八十八十二十八十二十八十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十
71	座 彼牧2万頃 □□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□	0.67	4.0	工 逐. 7.罪 -	٠. ه	٠. ه	(٠. ٥	٠. ۵	٠. ٥				÷ į	人間に依然了した。
13	杉谷3番塚古墳	25	2.5	丘陵上	٠.	٠.	٠.	<u>.</u> .			· ·		19/4 44	ŒĦ	昌山市兵治
14	石堤柏堂2号墳	22-26	2.5	丘陵尾根	٥.	<i>د</i> .	٠.	٥.	٠	6	ن	·略測			高岡市石堤字相堂
15	後谷3号墳	20.0	2.0	丘陵尾根	٥.	٠.	٠.	٠.	ئ	٠	٠	分調 19	1979 10.35	ì	小矢部市後谷
16	(公女4号) (4)	20.0	2.0	斤陵屋根	٥	٥	۰	٥	. 6	6	٥		1979 10.35		小矢部市後谷
17	でロンス 原油 和1 中神	30.0	0.0	T 医 下 防 尿 加	٠ ،	ۍ .	٠,	٠,	٠, د		٠ د				小午新市 松町 百ヶ谷
3	単似1/417分割	0.03	?	上下がずば							•			?	
E c	月 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日 1 日	(6日十四02/22	L	用るのと作者には	4	OFF	4	#	子也以中中的	德·王·佛斯上	#	可原		佳	再四里年四日
18	小田中親土塚古墳	6/(/2帆工员;)	14.5	氏口変編の複彩画	₩.	袋:	Æ 1	ij.j	野人丸石垒7·	规,比,数/70石	+c.⊁		71 6761	出	阿萨斯阿阿人田子
19	テンジクダイラ1号墳	23-27	5.8	丘陵尾根頂	#:	熊	熊	熊	木棺直葬	鉄器・低石	4c後-5c初			黑	鬼局都 煡 四町 龍登部上
20	芝垣円山1号墳	21.5	2-2.5	段丘端	争	熊	单	無	箱形石棺	鉄器·土師器	5c前半	発掘 19	1970 36	黑	羽咋市芝垣町
21	滝大塚古墳	約70	٠.	海岸段丘末端	争	٠.	有	有	竪穴式石室	須恵器·埴輪 (円筒)	5c前半	未調查·破壞	15.36		羽咋市滝町
22	森本大塚古墳	· 88	5.5	斤陸末端緩傾斜面上	٥	٥	中	中	٥	埴輪(円筒)	2c⊕	測量 16	1964 37	R	羽阼郡押水町森本
33	海5号墳	約50	6	海 市 野 市 木 雅	٠, ٥	۰،	٠.	: /	· Yi	埴輪(円億)	5c中-後				3. 医二种 3. 是一种 3.
6	た田中 二士暦	4300	7.5	经 格公面 上	· #	۰ ،	۰ د	: 14	1 6	高報(日徳)	2000年				7.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1
# LC	人田九田口頃女石田田田	7 47	. c	核配配 五十 沿山的 八十事	ŗ 4	· 1	. 4	Į.		·尚書(1.1月) 炻声别·枯軫(日称.15年)	۶. ۲.	返事 交击	20 020) E	0.655人压足后落于村下
3 6	人坦默日田口垣 计进步记载	45	0.0	(年) (1) (2) (2) (3) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	₽ 1	ŧ c	Ęς	Ęς		公问答: 奇崖(□匝·万米) 乌吕 素	÷ 1		1970	₹	名F 三
07	水牛子1万頃 1年一-7-12日本	#320	0.2	几聚伟使上 7.群山岩	Ę	٠. ۵	- 4	- 4	相形石作	坎茄•椰 ≠菘(田体)	∀ ~	IID, 47m	20 20	X F	
17	河原二つ十塚2ヶ頃	38.9	6.5	工聚 尾假	· .		便。	甲。	· · ·	画階(元 匝)	50.70	- 聖		₹	均库 郡 押 水 則 河 原
87	宮ノ山古墳	42-32(復元53)	. 9	女 中 岩 湯	伸.	3段か?	<u>.</u>	٠		## !!	5c天-6cか				治库市柳田町
29	滝6号墳	25(推定)	٠.	海岸段丘上	年	٠.	無	年	٠.	須恵器・埴輪 (円筒)	6c初				羽咋市滝町
30	滝2号墳	約20	2.5	海岸段丘末端	有?	٥.	٠.	無	横穴式石室	須恵器·埴輪 (円筒)	6c初		1970 15.36		羽咋市滝町
31	散田鍋山古墳	53	3.5	低台地上	巣	嶣	無	単:	横穴式石室	馬具·玉類	6c前半		1927 4	訊	羽咋郡志雄町散田
32	散田金谷古墳	18.5-21	3.5	低台地上	無	無	熊	無	横穴式石室	須恵器他	後期	試掘・測量 19	1973 4	宗	羽咋郡志雄町散田
33	能登部姬塚1号墳	約30 (復元)	5	丘陵尾根	٠.	٠.	٠.	٠.	石室	王類·須恵器	後期	分調·略測 19	1977 7	亜	鹿島郡鹿西町能登部下
34	矢田中瀬2号墳	29	3.2	ċ	ډ.	٥.	۰.	٠.	横穴式石室	釘・須恵器・土師器	6c 1/2	٠.	34	ħ	七尾市矢田町
35	新宮丸山1号墳	約20	# 53	丘陵端部	٠.	٠.	٠.	٠.	ż	٠.	ç	分調·略測 19	1979 5	宗	羽咋郡志雄町新宮
36	河原三つ子塚3号墳	36.7	5.1	丘陵尾根	٠.	٠.	争	۰.	ن	6.	ç.	分調·略測 19	1979 5	宗	羽咋郡押水町河原
37	コツボネ1号墳	35	3-5.5	丘陵頂部	۴.	٥.	٠.	۰.	6		ċ	分調·略測 19	1977 7	無	東島郡鹿西町能登部下
38	テンジクダイラ4号墳	35	9	丘陵尾根上	٠.	٠.	嶣	無		٠.	ć	分調·略測 19	1977 7	無	鹿島郡鹿西町能登部上
39	テンジクダイラ5号墳	29-32	5	丘陵尾根上	٠.	6.	٠.	٠.	ن	ن	ć		1977 17	廉	東島郡鹿西町能登部上
40	西馬場3号墳(雨支)	27-34	1.5 - 6.0	段丘先端	٠.	٠.	有?	٠.	٠	<i>د</i> .	٥.		1985 7	鹿	鹿島郡鹿西町西馬場
41	河原三つ子塚1号墳	27.5	5.2	丘陵尾根	٠.	٠.	有	٠.	٠.	٥.	٠		1979 5	惡	羽咋郡押水町河原
42	良川白良山古墳群A-6号墳	25.5-11.0	2.5-4.0	丘陵尾根上	6.	6.	٠.	٠.	٠,	٠	٠.		1982 16	廉	鹿島郡鳥屋町良川
43	柳田うわの6号墳	25	ć.	丘陵上	٠.	٠.	٠.	٠.	٠,	٠.	٠.		1959 36	黑	羽咋市柳田町
44	大槻 B 群8号墳	25(推定)	ć	独立丘陵上	٠	٠.	٥.	6	ن	٥	۲		1976 1	#	鹿島郡島屋町末坂・大槻
45	能登部冠塚古墳	20-30(推定)	ċ	平地	٠.	٠.	۶.	٠.	٠.	ç	٠.		1977 7	無	鹿島郡鹿西町能登部上
46	森の宮4号墳(雨支)	23-25	2.5	丘陵尾根	¢.	ć	٠.	٠.	ذ	ć	ç		1985 17	#	東島郡廉西町能容部森ノ宮
47	良川北古墳群 A-13号墳	24.0	5.0	丘陵尾根上	٠.	٠,	٠.	٠,	. 6-	٠.	٠.		1982 16	一種	
48	四ツ塚1号墳	20-25	9	丘陵尾根上	٠.	٠.	٠,	٠,	. 6.	. 6.	٠	測量 15			輪島市釜屋谷
													1	1	

470
Ñ
Ũ
0
麦
_
lab.

番号 古 墳 名	直径(m)	高さ(m)	立地	開溝	段業	葺石 丸	埴輪	主体部	出土遺物	中期	調査の種類・年		洪	所 在 地
良川北古墳群A-9号墳	27.0-18.0	0.9	丘陵尾根頂部	٠.	٥.	٠.	٠.		ć	6.	分調·略測 1982		16	鹿島郡,鳥屋町良川
永禅寺5号塘	22	2.5	丘陵頂	有	٠.	٠.	6.	٠٠	¿	¢.	分調·略測	1975	25	珠洲市上戸町
大網 B 群10号墳	22.0	22.0	独立下陸端部	٥	6	ç	٠.	ڼ	٠	6.	分調·略測	9261	1	鹿島郡鳥屋町末坂·大槻
4.20mm 13.30mm 能容部版 23.5mm 13.30mm 13	22	· ~	斤陸屋根 上	c	٥	ç	6.	٠,	٠.	٠.	分調·略測	1977	7	鹿島郡鹿西町能登部下
記り まずから ズ 服 多 の 35 中華	2 5	1-2	上 陸 屋 相 上	۰	۰	٠	6	6	ċ	٠.	分調·略測	1985	17	鹿島郡鹿西町雨の宮
至7日30分割	0.17	1 0	10000000000000000000000000000000000000	. د	۰۰	٠,	۰.	۰ ،	٠. د	۰	分調 路通	6261	LC:	羽 陀
河原川の十条5万頃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		5.0	工 変 化 似 上 7 年 1 日 1 日 2 日 2 日 3 日 3 日 3 日 3 日 3 日 3 日 3 日 3	٠. د	٠. د	٠. د	٠. د		· c	٠. د	少點. 點		16	第二部月4部11333
良川白良山古墳群 A -7 号墳		5-4	上 胶尾 根上	٠. ١	٠. ١	٠. (٠. ،	٠. (٠. (٠. ۵			2 .	另四部运用四 农工品 早期十年里 书日
金谷7号墳	約20	٠.	低台地上	٠.	٠.	٠.	٠.	٠.		٠. ١			n .	为咋都亦 傑馬 敦田田 新井 雅井
金谷8号墳	約20	٠.	低台地上	٥.	٠.	ç.	٠.	۰.	¢.	ç.	分調·略測		2	拟咋郡志雄町散田
国浩川古墳群C群N0.26号墳		2.0	低丘陵尾根上	ç.	٠.	٠.	٥.	٠٠	ċ	¢.	分調·略測	9261	_	七尾市東三階町
正位出口・英語 されいこう・プァイ 田田 祖1 中華 (昭本)		i -	四十十四日	٠ د	۰ ۵	۰	٠	۰		ç		1985	17	鹿島郡鹿西町西馬場
四场参10点(周文)	707	, 640	大工人当り得まれ	٠. د		٠.	٠.	٠ ،	. c	٠, د		1070	i 4	松白木町町町休口
伏戸古墳	* 520	約3	叶 胶瘤	٠.	. .	×	٠.,		×. (٠. (6761	ο,	電頂に可当所1人子 ロ十月ロ月
町屋No.7号墳	約20.0	2.5	低丘陵上	٥.	٠.	٠.	٠.	٠.	··	٠.	逆	1976	_	力死亡馬屈馬
矢田天満宮古墳	約20	٥.	<i>د</i> .	6.	٥.	٠.	٠.	٠.	٠.	٠.	未調査	•	\$	七尾市矢田町
40]														
表 1 分 医 1 5 四 本	(世集)000	c	口隔处旧	4	#	Ħ	Ħ	6	十師器	単脚	料相	1983	=	加賀古大聖寺敷助町
叛地干到山3万頃	20.0(推定)	٠. ٥	二 夜 水 国	ŗ.	∯ ¢	Į c	į c		The state of	10 m	1 車		: 6	発文:: ペコングロン 今:2 七点 右 戸
野田山二角点占墳	42	5-2	H.H.	į .		٠. :	;	#	} }	+1.77	三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三			47777000000000000000000000000000000000
無常堂古墳	56	1.5	丘陵端部	熊	熊	#i	#i	木陌直葬	鉄希・圡類	甲朔彻頭	光描		18	
小坂1号墳	23.3-25	4-5	丘陵尾根頂部	無	無	無	無	木棺直葬	鉄器·石製品·土師器	5c部半	光描	1969	21	金沢市小坂町マノ部
和田川19号墳	18 5-20 5	2.7	土盤山	押	甫	用	崩	木柏直葬	鉄器・十師器	5c後半-6c	発掘	1979	30	能美郡寺井町和田山
作用田立の女化市日本の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の大学の	A6_60 0/指4日9)		400円 1	: 0	(6	[c	₩	□ L 指権 企 ま T 定 か	件器·禁身目·玉韬·埴輪	5c後半-6cか	分調·略測	1977	2	加賀古宮塚町
国外九田口垣	49_30.0(WLXX:)	٥.٠	(京) 国上	. 1	. į	. į	ŗį	がゴボボングゴサッ	次世文と 、一人を、可言 発生者	6-20	田神田木		, c	4. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.
和田川23号墳	7.7.	n	上溪上	Æ.	⊭ .	⋕ .	į .			0c-f/J	回年配出		8 8	売米等サナ型 合田田 は米割す 上野 合田 上
和田山6号墳	82	4.5	丘陵上	单	熊	熊	巣	黄穴式石室	土類·須患器	66間半	頃形調金		200	配夫郡守开町和田田
和田山1号墳	24	2	丘陵上	仲	無	無	無	木棺直葬	鏡·鉄器·玉類·土飾器·須恵器	6c前半	発掘	1977	8	能美郡寺井町和田山
和田川3号墳	33.5	2	斤陵上	有	埔	#	単	٥.	上師器	6cη ₂	墳形調査	1977	30	能美郡寺井町和田山
日子子 人名马马士	08.0	· Ľ	小李郎	: 14	與	۰	٥	6	須恵器	6c th	分調·略測	1977	2	小松市月津町
乙年米丁丑二女女子,口事	0.00	· •	「孫徐郎」	E c		. د	٠.	٠.			今腦, 聚当		. 6	
松田1万頃	30.0	0.4	Ŕ	(ξ ·	٠. ٥	6			٠. د	2 記録 記述 大器 見記		1 (经成品发出的 化甲字母
鉢伏西山古墳	32	2	丘陵上	٠.	· ·	· ·	· ·		×- 1	٠. ،	グ調・略選	×	γ ;	河北部十八河町弊1人
小坂8号墳	約30.5	0.9	丘陵尾根上	٥.	٥.	٠.	٠.	٠.	¢.	¢.	略測		3.51	金沢市小坂町
御所八ツ塚1号墳	約27	4	丘陵上	٥.	٥.	<i>د</i> .	۲.	٠	٥.	٠.	分調·略測	1978	3	金沢市御所町
分校チャカ山10号墳	25.0	4.0	丘陵尾根上	6.	٠.	٠.	٠.	٠	٠.	ć.	分調·略測	1977	2	加賀市分校町
袖谷内5号墳	25	4	斤 陈屋根 上	٥	۰	¢.	٠.	٠	٠	¢.	分調·略測	1978	3	金沢市神谷内町
御所八ツ坂4号墳	25	4	上盤上	٥	٥	۰	۰	٥	6	6	分調·略測	1978	3	金沢市御所町
写//・/・/ ※まらば 戸田二/1中福	97-93	8 -	1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2	۰ ،	۰ ،	۰ ،	۰ ،	۰ ،	. 6	٠, د	小調·略測	۰	14	小杉田 J 田・諸田
の田田4つ気によった一世	67-17	0.1	11/8十四十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	. 4	٠. د	· 1	· 1	٠. د	- 一	٠ ،	お 単語 ・		13	全球形式 前日
おまる塚白墳・ゴーニー	47-77	۰ ،	區人斯洛女司	Æ d	٠. ه	# o	ii d	٠. ۵	上時間	٠. ۵	以祖·宫里 () 王		5.5	持人によると
小牧3号墳		2.5	丘陵尾限上	٠.	٠.	٠.	٠.	. .	·-		分調·略測		3.51	並 次中小坂町
敷地春日町8号墳	22.5	3.0 - 4.0	丘陵稜線上	٠.	۰.	٠.	۰.	٠.	٠.	٠.	分調·略測	1977	2	加賀市大聖寺春日町
小菅波神社裏C古墳	22.0	0.9	台地斜面上	有?	٠.	٠.	٠.	¿	٠.	٥.	分調·略測	1977	2	加賀市小菅波町
吸坂 C 古墳群4号墳	21.7	1.3	斤陵頂部平坦面	¢.	۰	¢.	٠	6	٥.	٠.	分調·略測	1977	2	加賀市吸坂町
(人)	21.5	3 0	丘陸尾相上	۰	۰	۰	٠,	6	. 6	~	分調·略測	_	2	加智市吸坂町
次次は少にに口ばれいたのには、	10 E-99 E	0.0	10000000000000000000000000000000000000	. د	۰ ،	٠ ،	۰ ،	. 6	٠. د	۰ ،	今調·略迪		١٥	加智市助护斯
WWA ロ頃件60頃 一:野・上注頭6口注	10.37-6.0	0.0	工 效仪棒工	٠. د					·· c	٠. د	の		a c	4.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1.1
二ツ則 A 占頃群3方頃	21.0	3.0	打 冢潘忠	٠. (٠. (٠. (٠. ه	٠. (٠. (٠. ۵	万里, 岳宫	1311	2 0	加其ホーン町もおせしの野
三谷F古墳	21.0	4.0	上 陵楼褓上		· ·	×. ,	٠.,	· ·	×. (٠. ،	万遇,强到	1161	7	加其市门合司
来丸2号墳	21	2.5	丘陵端部	٠.	٠.	٠.	∼ .	٠.	·.	٠.	分調・略測	1985	14	能表郡辰口叫米丸
御所八ツ塚2号墳	約20(帆立貝?)	4	丘陵上	٥.	ç.	۰.	۵.	٠	٠.		分調·略測	1978	က	金沢市御所町
御所八ツ塚3号墳	約20	4	丘陵上	٠.	ç.	٠.	٠.	ć	٥.	٠.	分調·略測	1978	23	金沢市御所町
御所八ツ桜5号雄	20	4	上盤上	۰	٥	۰	د	6	ć	ن	分調·略測	1978	3	金沢市御所町
再二八八分のプロサロ金属に土井	8 8	י ער	1 年	۰ ،	۰ د	۰ ،	۰ ،	٠ د	٠ ،	ۍ .	分調·略測	1978	· 67	会沢市才田町
ム日写いヨロ丘を見る	000		一月五十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	٠. د	٠. د	٠. د	٠.		۰. ۵	٠. د	小部 品版	1077		単が出る日本
器町占垣	0.02	0.0	日刻補明四へ	٠.	٠.			٠.			つ配・西部	1211	3	MINITELLATION
			1	. (. (. ,		. ,	,	,	100, 4mm HT 17	0000		は一十一条に

22					200	•	٠							//II 팃 / 1/시 기소씨
		4	丘陔尾根无端	甲。	<u>, </u>		(· ·		分調·略測		2	加賀市片山津町
吸吸伸明伸任白填群2万填 I 里瓣细柱门 D 土棒群1 早樓 1	17.0-22.0	2.5	工隊 尾侬上 口陈陌如沙扫面	۰. ۵	٠. د	۰. د	٠. د		·· c	٠. د	分割・器割り		20 0	加賀市吸牧町 七畑十田 落町
	18.0-20.6	3.1	元 陵城 一年 五 五 五 五 五 五 五 五 五	٠. ۵٠	٠. ٥٠	٠, ۵.	٠, ۵.		. 6.	٠. ۵٠	分調・略測	1977	7	加貫巾羔爾門加賀市分校町
ċ		9 8	1 陸四難 1	#	6#			名の手木格	十年點	岩	# X2	, 6201	00	计用语句 二十六字
33 13		2.2	山頂	一	!: 崩	1 単	開開	コンス 知坊式木棺	上呼 明 铁器•管形编器	2 年	化油	. 6561	3 2	据中17年间 62 米耳箱井木 小二公里,足到一
20		٥.	丘陵端部	有	単			割竹形木棺	鉄器	前期後半	光點		8	輔江市長泉町·水落町·小黒町
Ø	20-25 (57-60)	3	山頂	٥.	2段?		,,	舟形石棺	鏡·石製品·玉類	4c末	発掘		19	福井市小山谷町·足羽山
ဣ	_	7	丘陵稜線上	無	無		••••	家形石棺	鏡·装身具·鉄器他	4c末-5c	発掘	1952	19	福井市小山谷町·足羽山
12		1.3-4.3	台地端	無	無		無	朝竹形木棺	兼	4c末-5c初	発掘	0861	88	坂井郡芦原町井江葭
Ř		4	丘陵端部	熊	無			木棺直葬办	無	4c末-5c初	発掘	1962	88	坂井郡三国町浜地
09		7	台地上	单	殺		単	۷.	祟	5c前半か	周溝調査	1984 2	23.39	鲭江市田所町
×	20-23	4.5	丘陵頂	無	巣	無	有	舟形石棺	鏡·鉄器·玉類·埴輪(円筒)	5c中	発掘	1983	88	福井市西谷町·月見町
×		2	丘陵稜線上	祟	祟	,,,,		舟形石棺	鉄器•櫛	5c後半	発掘	1957	19	福井市小山谷町·足羽山
4(9	丘陵尾根上	٠.	٠.			割竹型木棺	鏡·鉄器·王類·武具·櫛·耳飾り	5c	発掘	978-79	33	福井市篠尾町
23	23-24	3.8	丘陵末端	٠.	無		1	木棺直葬	鏡·鉄器·玉類·砥石·埴輪(円·形)	5c	発掘		88	福井市堅立·重立町
×	20以上	2	丘陵裾平地	٠.	無		無	~.	埴輪(円筒)	5c	分調·略測	197? 4	48	吉田郡松岡町吉野字馬落
83	28-30	2	丘陵端	٠.	٠.		1	木棺直葬	鉄剣	$5c \eta$	発掘	2961	20	鳍江市西山町
23		3.7	丘陵尾根上	٠.	٠.		٠.	~.	ڼ	5cft	発掘	1977-79	42	福井市荒木・高尾
23	22.2	4.1	丘陵上	٠.	٠.		٠.	~.	ć	$5c \dot{n}$	分調·略測	1974 9	•	大野市牛ケ原·矢
22	20.0	3.1	丘陵尾根上	6.	٥.	د	٠.	~:	ن	$5c \eta^{\lambda}$	分調·略測	1974 9	•	大野市牛ケ原·矢
33	31.5	5.0	丘陵尾根上	٠.	٠.	٠.	٠.	~.	須恵器片(5c)	$5c \eta$	分調·略測	1974 9	•	大野市太田南向山
22	20.2	4.3	丘陵尾根平坦面	٠.	٠.	٠.	٠.	~.	6	$5c \lambda$	分調·略測	1974 5	•	大野市太田南向山
83	0.	2.3	丘陵尾根平坦面	٠.	٠.	٠.	٠.	~.	ن	$5c \mathcal{D}$	分調·略測	1974 5	•	大野市太田南向山
25		4-6	丘陵斜面平坦面	無	無	.,,,		劉式程·林館集計基	鉄器・須恵器	6c初	発掘	1971 2		鳍江市入町·西番町
8	20-21	3	丘陵上	無	無			黄穴式石室	鉄器·馬具·土飾器·須恵器	6c後半	発掘	1953 3	&	吉田郡松岡町字弁才天谷
23	.5	3.0	平地	٠.	٠.	٠.	-	横穴式石室か	6	後期か	分調·略測	1974 9	•	大野市下舌下舌
22	22.0	2.0	平地	٠.	٥.		? 梅	横穴式石室か	3	後期か	分調·略測	1974 9	_	大野市下舌下舌
8	20.0	3.5	平地	٠.	6.	٠.	-	横穴式石室か	6	後期か		1974 9	•	大野市下舌下舌中
32		٠.	丘陵頂部	٠.	٠.	٠.	٠.		٠	٠.	調·略測	1973 4	. 48	福井市堅立·重立町
83	29.6-31.0	5.6	丘陵上	٠.	٠.	ç	٠.		٠.	٥.	;	4		福井市三十八社町
83		٠.	丘陵尾根頂部	٠.	ç.	٠.	٠٠.		٠	٠.	分調·略測	197? 4	48	吉田郡松岡町上吉野東長田
83	2.92	4.0		٠.	٠.	٠.		黄穴式石室か	٠.	٠.			42	福井市荒木・高尾
3 1	23.6-25.8	4.9		(有)	۰.	٠.	٠		٥.	٠.			40	福井市帆谷町·北山町
3 8	23.6-24.9	3.0	ч	一年	٠.,	٠.,			··	٠.			40	福井市北山新保町
3 8	23.0	· · ·		· · ·	·· ·	· .	0		٠. (٠.٠			48	吉田郡松岡町
3 8	ı	٠		٠. (٠. ,	٠. ر				٠.				吉田郡松岡町
77.	21.5	2.4	山	٠. ١		٠.,			٥.	¢.				鯖江市長泉町・水落町・小黒町
£ .	#JZ0	4.5	上陵頂	٠.	٠.	٠.	ф П	朝竹形木棺	浦	٠.	分調·略測	19? 4	42	福井市池寄
8		2.4		٠.	٠.	٠.	٠.		٥.	ç.	分調·略測	2 9861		靖江市長泉町・水落町・小黒町
18	18.8-20.1	1.5	丘陵尾根上	(単)	٠.	٠.	٠.		٥.	ċ	分調·略測	1974 4	40	福井市帆谷町·北山町
į									:					
3 1		4					V-1,-	割竹杉木棺	鏡・鉄器・玉類・土師器	4c後半				敦賀市吉河
22	22.4	1.9	炎丘上	熊		.,,,	4.1		鏡·鉄器·装身具·玉類	中期初頭	発掘	8 9261	38	敦賀市井川75号立洞1-2
09		6						整穴式石室	鏡·鉄器·玉類·須恵器他	5c未	発掘]	2961	88	敦賀市古河
20		5	丘陵尾根中腹	有				横穴式石室	鉄器·馬具·玉類·須恵器他	66前半			85	漢野 III 中町 大学下夕中学大谷
22	50以上	10	水田中	有		無	無	横穴式石室	鏡·鉄器·馬具·王類·須恵器他	⊕39				海球ボーン・ス・ファロ 液動 東東 下中門 大街 井
绺	約30	٠.	山裾					有穴式石室	6	⊕. ⊕.				子说出 古珠
8	3011 F	3.8U F	華三	ر د	· ~		11 推	ボンパ 世帯 小土 上水	٠, د	\$ # \$	祖 即			4.宋中祖父子弟士士林



北陸における円墳の規模と外部施設(周溝、段築、葺石、埴輪)

外部施設の種類については全体の中で周溝を備えるものが19.2%とやや多いのに対し、段築・葺石・埴輪は 7~8%台と低い。これを I a 群~II b 群の群別でみるならば、 I a 群が周溝・段築・葺石各75%、埴輪25%、I b 群が周溝60%、段築・埴輪各40%、葺石20%、I a 群は埴輪35.7%、周溝・葺石各28.6%、段築7.1%、II b 群は周溝14.6%、段築・葺石・埴輪各4.1%である。 I a 群まではある程度外部施設を備えているが、 II b 群では周溝を除いてはほとんど外部施設がみられなくなっている。なおこれら 4 項目の外部施設を全て備える円墳は北陸では確認できない。 3 項目備えるものについては、石川県鹿島郡小田中親王塚古墳、同羽咋市滝大塚古墳、同滝 6 号墳、同柴垣観音山古墳がある(第1表)。以上のことから北陸では外部施設の整う円墳は数少なく、かつその分布は能登に多いという傾向をうかがえる。

このように規模から抽出した群別は、外部施設の在り方の違いとかなり密接な関係があり、 一定の意味をもつと考える。なお墳丘の高さ、埋葬施設、副葬品についても同様の分析が必要 であるのは勿論であるが、Ⅲ群小型円墳も含めて別稿で検討したい。

2 時期・地域別の規模 (第12・13図)

前項で、北陸古墳時代の円墳を一括して群別したが、それは時期・地域別の特色を記述するのに際して、その前に北陸全体の概観が先ず必要と考えたからである。その上でここでは全体の年代的な変化をみた後に地域毎の様相を検討することにしよう。

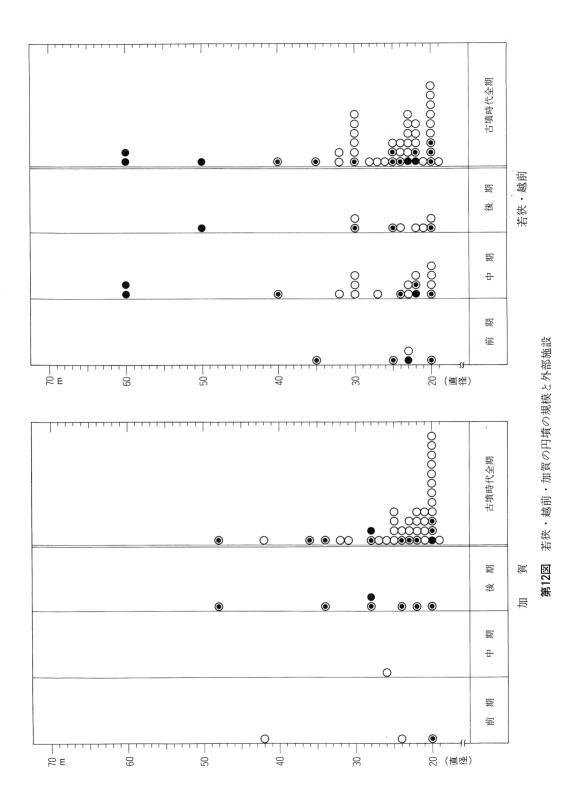
古墳時代前期には、直径20m以上の大・中型円墳は数が少なく、特に I a 群特大型円墳は直径67mの石川県鹿島郡小田中親王塚古墳が知られるのみである。この古墳からは、日本海岸における三角縁神獣鏡分布の東限となる三神三獣鏡が出土して、その独特の地位を物語っている。中期には、大・中型円墳の築造数が急激に増し、時期の判る I 群大型円墳のうち 6 割は中期に属している。特に I a 群特大型円墳についてみると前期の一例を除いて、すべてこの時期のものである。また II a 群中大型の円墳も 7 割が中期に築造されている。

後期には、 Ⅰ 群大型円墳の築造数が減少し、かつ I a 群特大型円墳は知られていない。また Ⅱ 群中型円墳も増加しているとはいえず、 Ⅱ a 群中大型の円墳が減少した。他方これと軌を一にして Ⅲ 群小型円墳が著しく増加し、中期までとは異なる様相が生じてきている。

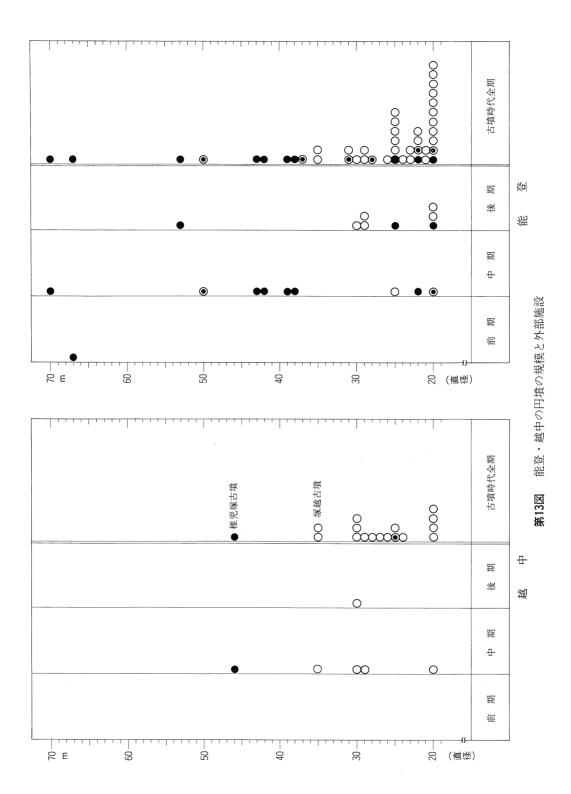
次にこれらの点について、旧国別に検討を加えることにしよう。

若狭・越前:若狭7・越前37古墳をとりあげる(第12図右)。 Ia 群特大型円墳は両者に1基ずつあり, Ib 群大型円墳は3基確認できる。時期別にみると,北陸全体と同じく前期に少数の円墳を築き,中期には大規模なものが築造されて数が増す。また後期には全体的に規模が縮小してその数も減少していく。次に外部施設についてみると,複数の外部施設を持つものは全体の約1割,単数のものは約2割を占める。またI 群は全て複数の外部施設を持つが,II 群は外部施設を持つものが約3割である。

加賀:計40基を確認し得る(第12図左)。 Ia群特大型円墳はみあたらず、 Ib群大型円墳 1



- 42 -



基, Ⅲ群中型円墳39基である。時期については不明のものが多いが前期から中期に築造数が減少し、なかでも大規模な円墳は前期と後期に築造されている。外部施設についても不明なものが多いが、最大規模の富塚丸山古墳は唯一埴輪を備え、Ⅲ群は周溝を備えるものが多い。

能登:計44基をとりあげる(第13図右)。その内容は I a 群特大型円墳 2 基, I b 群大型円墳 2 基, II b 群中小型円墳33基であり, II a 群大型円墳のなかでも大型のものは当地域に多い。時期別にみると,前期に I a 群特大型円墳が1 基築造されてはいるが,全体として中期になると I 群大型円墳, II a 群中大型円墳が増加する。後期には I b 群大型円墳 1 基を除いた I 群大型円墳, II a 群中大型円墳も築造されず, II b 群中小型円墳が増加している。外部施設については,複数の外部施設を持つものが全体の約 2 割,単数が約 1 割であり,北陸の他地域と比較すると複数の外部施設を備えるものが多く,その傾向は周溝・葺石・埴輪に多くみられる。

越中:現在のところ直径20m以上の円墳は17基確認し得る(第13図左)。このうち I a 群特大型円墳は確認できず、富山県立山町稚児塚古墳が最大、同塚越古墳は2番目の規模である。時期については不明のものが多いが、大・中型の円墳はおもに中期に築造されるようである。後期の様相についてはまだ充分な資料が得られていない。同じく外部施設もほとんどが不明であるが、稚児塚古墳が複数の外部施設を持つ唯一の古墳である。

このように北陸の直径20m以上の円墳を,時期・規模・外部施設の点から地域別に比較・検討してきたが以下でこれらの点についてまとめておきたい。

今回北陸における直径20 m以上の円墳146基をとりあげた。これらを地域ごとに比較すると I a 群特大型円墳は分布が能登に 2 基,若狭・越前に各 1 基とかなり限られており,規模も他 と比較して特に突出していることが判った。これらは前期の一例を除いて中期に築かれている。 また I b 群大型円墳は北陸全体に分布するが, I a 群特大型円墳を確認できない越中・加賀においては最大規模のものとなる。そして若狭・越前・能登においてもこれらは I a 群特大型円墳に次ぐグループをなすことを確認し得る。また I b 群大型円墳は中・後期に築かれているが,後期にはこれが最大の円墳となっている。 II 群中型円墳は北陸各地で築造されるが,なかでも規模が大きく外部施設の整ったものは能登に多いといえる。後期において II a 群中大型円墳が減少し, II b 群中小型円墳が主となることは, I a 群特大型円墳と I b 群大型円墳の関係と一致し, II 群と II 群の大別に意味のあることを示していると考える。

3 前方後円・前方後方墳と円墳

次に北陸の前方後円・前方後方墳の変遷を地域ごとに概観し、円墳の変化と対比したい。

若狭・越前:若狭では確実な前期の前方後円墳は確認されていないが、三角縁神獣鏡が2例出土している。中期に入ると、福井県上中町上之塚古墳(全長90m余、周溝・段築・葺石・埴輪を備える)などの大型前方後円墳が築造され、中期後半から後期にかけては大型前方後円墳

の築造がみられるが後期前半には築造されなくなる。越前では古墳時代前期には福井県福井市安保山1号墳(全長約32㎡),同2号墳(全長約34㎡)が築造されるが,これらは外部施設を有していない。前期後半には福井県松岡町手操ヶ城山古墳(全長約110㎡,段築・葺石・埴輪を備える)が築造され,その後も越前では北陸最大級の前方後円墳が継続して築造されている。これらの古墳は外部施設も整い,畿内色の濃いものが多い。後期に入るとその規模は縮小し,福井県金津町神奈備山古墳(全長約74㎡)を最後に築造を終える。

加賀:現在のところ古墳時代前期の確実な大型前方後円墳は確認されていないが,石川県加賀市吸坂D-13号墳(全長68.3m)[®],大型前方後方墳では同吸坂A-3号墳(全長61.0m)[®]にその可能性があることを田嶋明人氏に教示いただいた。中期になると石川県寺井町秋常茶臼山1号墳(全長約105m,葺石を備える)が加賀南部で,北部では同金沢市長坂二子塚古墳(全長54m,埴輪をもつ)が築造される。その後,中期後半から後期にかけて各地で前方後円墳が築造されるが,後期前半には一部の地域を除いて築造を終える。

能登:古墳時代前期初頭から前方後方墳の築造が盛んであり、特に邑 如地溝帯を中心として石川県鹿西町雨の宮 1 号墳(全長約70 m、段築・葺石を有する)のような大型のものが知られている。前方後方墳は中期に同鳥屋町川田ソウ山 1 号墳(全長45 m)が築造されるが、その後は姿を消す。

一方,大型の前方後円墳は雨の宮1号墳と同時期頃と考え得る石川県鹿西町雨の宮2号墳(全長約70m,段築・葺石を備える)の築造が最初であり、その後前方後円墳は一たん築造されなくなるが中期後半から能登の各所で多く築造され、後期中頃にはその築造を終える。

越中:前方後円・前方後方墳の確認数は北陸の中では少なく、その規模も小さい。古墳時代前期には、前方後円墳は富山県小矢部市谷内16号墳(全長約47m)、同関野1号墳(全長約65m,段築を備える)、同高岡市桜谷1号墳(全長約62m)、同婦中町勅使塚古墳(全長75m,段築を備える)がある。前方後方墳では同婦中町王塚古墳(全長約62m)があり、これらは越中最大級のものである。しかし中期に入ると、前方後円・前方後方墳の築造は目立たなくなり、前方後円墳の富山県富山市古沢塚山古墳(全長約41m)がその可能性を持つものとして挙げ得るのみである。中期末~後期初頭の頃再び同小矢部市若宮古墳(全長約48m,埴輪を備える)、同氷見市朝日長山古墳(全長約43m,埴輪を備える)といった前方後円墳が築造される。

以上の前方後円・前方後方墳の変遷をまとめると、次のようになるであろう。

古墳時代前期には、北陸において広く前方後円・前方後方墳を築くが、その中でも、能登に 古くから規模の大きなものが存在し、越中にも最古期から本格的な前方後円墳が築造される。

中期には、若狭・越前・加賀南部において、前期よりも巨大な前方後円墳を築造する一方で、 能登・越中においては、前方後円墳は減少を見る。この2地域では中期の終りになって、再び 前方後円墳を築造した。

後期に至ると、北陸各地を通じて前方後円墳は小型化して減少し、後期後半(6世紀後半)

にはその築造を停止したらしい。

本稿で検討した円墳の動向と、前方後円・前方後方墳の変化の関係は、以下のように理解したい。

北陸において,前期から中期にかけて,若狭・越前では継続して前方後円墳と大・中型円墳を営むが,加賀と能登・越中は対照的な歩みをたどる。能登・越中においては,中期になると,前方後円・前方後方墳が衰退する一方で,大・中型円墳が増加する。逆に加賀においては,中期に前方後円墳を多数築造し,大・中型円墳は目立たない。

中期末の変化(能登・越中における前方後円墳の復活)をへて後期に至ると、北陸を通じて前方後円墳の築造が少なくなっていく。そして、 【群大型円墳、 【群中型円墳に加えて、多数の 【群小型円墳が築かれた。また 【群、 【群ともに、その中に大小の別があったものが、 【b群大型円墳と、 【b群中小型円墳に整理されてくることに注目したい。その結果、大・中・小型円墳の規模の差がより明確に表現されるようになってきた。この段階では格差の表現が前方後円墳と円墳ではなく、円墳の規模の差に重点を移してきたように見える。

結び

古墳の築造には多大な労働力を必要とするため、古墳の規模がそこに葬られた人、あるいは その後継者の力や社会的地位を表わしていることは疑えない。ただしこの点を具体的に明らか にするためには、時期・地域毎に、墓制の全体像を把握しなければならないであろう。

本稿では、円墳の規模とその意義が、古墳時代前・中・後期と三期区分にそう形で、変化しているという結果を得た。

すなわち前期には、北陸各地において、前方後円・前方後方墳が築かれる一方で、若干数の 大・中型円墳が併行して築かれた。それに対して中期には、前方後円墳が築かれる地域(若狭・ 越前・加賀)と、大・中型円墳が盛行する地域(能登・越中)とに分かれるようになってきた。 後期には前方後円墳が衰退するとともに、大・中・小型円墳が主流となる。このように同規模 の円墳の被葬者の位置づけも、時期と地域によって異なってくるであろう。

おそらくは社会的地位の表現において,前期は前方後円・前方後方墳の規模の差が重要であり,中期を転機として後期には円墳の規模の差をより重視するようになってきたものと推察したい。その結果,墳墓に身分の上下を表わす階層が飛躍的に増加している。これを大化薄葬令にみるような古代の墓制に至る一つの過程と考えることも可能であろう。

最後に富山県立山町稚児塚古墳と同塚越古墳とについてふり返ってみたい。これらは未調査であるが、中期のものと推測することが許されるならば、古墳時代前期から中期へかけての大きな政治的変化を反映している可能性が高い。

先に示したように古墳時代前期には越中西部において相当数の前方後円・前方後方墳が築かれる。それに対して中期には円墳が主流となり、かつ越中最大の円墳である稚児塚古墳と第2

位の塚越古墳が越中東部に位置することになる。これら2古墳の立地する常願寺川扇状地扇端 部は、弥生中期以後、開発が進んでいたところであり、その変化の背景はおそらくは政治的な ものであったろう。

古墳時代中期の政治体制について、都出比呂志氏は、小野山節氏の古墳規制論をふまえつつ、ある首長は抑えて帆立貝式古墳や円墳を築かせ、特定の首長にてこ入れして前方後円墳の築造を許す方式があったことを示している。私達が測量調査を実施した2古墳は、このような政策が、北陸東部にまで及んでいたことを示していると考えたい。またこの新たに円墳を営むようになった地方の中においても、政治構造の変化があった可能性が高く、これらの円墳に示される施策が次の群集墳を生む母胎となった可能性のあることを指摘して、今後の調査の進展を待ちたい。

[注]

- ① 石川考古学研究会「鳥屋・高階古墳群分布調査報告-石川県主要古墳群分布調査報告第1年度-」『石川考古学研究会々誌』第20号、1977年。
- ② 石川考古学研究会「江沼古墳群分布調査報告-石川県主要古墳群分布調査報告第2年度-」『石川考古学研究会会誌』第21号,1978年。
- ③ 石川考古学研究会「北加賀地域古墳群分布調査報告-石川県主要古墳群分布調査報告第3年度-」『石川考古学研究会会誌』第22号,1979年。
- ④ 石川考古学研究会『能登散田金谷古墳』1978年。
- ⑤ 石川県立埋蔵文化財センター『県内遺跡群詳細分布調査報告書 [(昭和54・55年度)』1984年。
- ⑥ 石川県立埋蔵文化財センター『県内遺跡群詳細分布調査報告書Ⅱ(昭和56-59年度)』1985年。
- ⑦ 石川県鹿西町教育委員会『雨の宮古墳群の調査(テンジクダイラ1号墳発掘調査報告)』1978年。
- ⑧ 宇ノ気町史編纂委員会編『石川県宇ノ気町史』1970年。
- ⑨ 大野市教育委員会『山ヶ鼻古墳群』大野市文化財調査報告第1冊, 1980年。
- ⑩ 小矢部教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市遺跡地図台帳』1985年。
- ① 加賀市教育委員会『敷地平野山古墳群-詳細分布調査報告書-』加賀市埋蔵文化財調査報告第21 集, 1984年。
- ② 鹿島町教育委員会「鹿島町の考古資料」『鹿島町史』資料編(続)上巻、1972年。
- ⑤ 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会『おまる塚古墳測量調査報告書・笠舞 A 遺跡分布調査略報』金沢市文化財紀要16、1978年。
- ④ 金沢大学考古学研究会『金沢大学考古学研究会活動報告第4号-能美地域の古墳群と梯川流域-』 1986年。
- ⑤ 河村好光「滝古墳群」『石川考古学研究会会誌』第24号,1981年。
- ⑯ 唐川明史「鳥屋町北古墳群を中心とする分布調査報告」『石川考古学研究会会誌』第27号, 1984年。
- ⑰ 唐川明史「石川県鹿西町内における古墳群分布調査報告-西馬場古墳群・森の宮古墳群・鷹王山 古墳群-」『石川考古学研究会会誌』第29号,1986年。
- ⑱ 小松市立博物館『埋れていた郷土の古代−最近の調査の成果−』1984年。
- ① 斎藤優『足羽山の古墳』1960年。
- ② 斎藤優他『福井県鯖江市王山·長泉寺山古墳群』福井県教育委員会, 1966年。

- ② 斎藤優『越前鯖江 天神山古墳群』1973年。
- ② 斎藤優『若狭上中町の古墳』1970年。
- ② 鯖江市教育委員会『西山古墳群』1987年。
- ② 志賀町教育委員会「志賀町の考古資料」『志賀町史』資料編第1巻別冊、1974年。
- ② 珠洲市史編纂専門委員会『珠洲市史』第1巻資料編 自然·考古·古代, 1976年。
- ②⑥ 高岡市教育委員会『富山県高岡市西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』1986年。
- ② 田鶴浜町史編纂委員会編『田鶴浜町史』1974年。
- 28 立山町『立山町史』上巻, 1977年。
- ② 立山町教育委員会『立山町埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1988年。
- ③ 富山県『富山県史』考古編,1972年。
- ② 富山大学人文学部考古学研究室『関野古墳群』富山大学考古学研究報告第1冊,1987年。
- ③ 中司照世「古墳時代」『図説 発掘が語る日本史』第3巻 東海・北陸編, 1986年。
- 砂 七尾市史編纂委員会編『七尾市史』1974年。
- ③ 西井龍儀「若宮古墳とその周辺の遺跡について」『かんとりい』No 7. 1983年。
- ③ 羽咋市史編纂委員会編『羽咋市史』原始・古代編,1973年。
- ③ 橋本澄夫「石川県押水町森本大塚古墳の予備調査-葺石と埴輪を有する墳丘装飾の一例―」『石川 考古学研究会会誌』第10号,1966年。
- 38 福井県『福井県史』資料編13考古,1986年。
- ③ 福井県教育委員会『文化財調査報告第17集』1967年。
- ⑩ 福井県教育委員会『太田山古墳群』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第8集, 1976年。
- ④ 福井県教育委員会·古代学協会『福井市宿布古墳群』1985年。
- ⑫ 福井考古学会『福井考古学会会報』第9号,1985年。
- ④ 福井市教育委員会『中山2号墳・三十八社3号墳』1987年。
- (4) 藤田富士夫『富山』日本の古代遺跡13, 1983年。
- 46 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図-石川県-』1976年。
- 46 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図-富山県-』1974年。
- ④ 文化庁文化財保護部『全国遺跡地図-福井県-』1980年。
- 個 松岡古墳群を守る会『松岡古墳群の埴輪』1982年。
- 49 松岡町教育委員会『改訂 松岡古墳群』1979年。
- ⑩ 谷内尾晋司「輪島市釜屋谷四ツ塚古墳群」『石川考古学研究会会誌』第16号, 1973年。
- ⑤ 吉岡康暢「金沢市小坂1号墳の調査」『石川考古学研究会会誌』第13号, 1970年。
- ② 輪島市史編纂委員会『輪島市史』資料編第3巻,1974年。
- ⑤ 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第63巻第3号、1970年。
- 函 小矢部市教育委員会・小矢部市埋蔵文化財分布調査団『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ』小 矢部市埋蔵文化財調査報告書第12冊,1983年。
- ⑤ 小矢部市教育委員会·小矢部市古墳発掘調査団『若宮古墳』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第18 冊, 1986年。
- 66 都出比呂志「古墳時代」『向日市史』上巻、京都府向日市、1983年。
- ⑤ 富山大学人文学部考古学研究室『谷内16号古墳』富山大学考古学研究報告第2冊, 1988年。

第4章 東大寺領大荆荘をめぐって

宇 野 隆 夫

北陸における著名な初期荘園の一つとして、富山県中新川郡立山町泉・寺田・若宮付近に比定される東大寺領大荆荘がある。これについては従来、文献・絵図・歴史地理の方法によって多くの研究が積み重ねられてきている。この成果に加えて、1988年度に当地区の遺跡分布調査を実施した結果、いくつかの興味深い事柄が判明してきた。これらのことを踏まえて、大荆荘及びそれがもつ歴史的意義について、現在、知りえる限りのことを整理しておきたい。

1 研究 中(第14~16図)

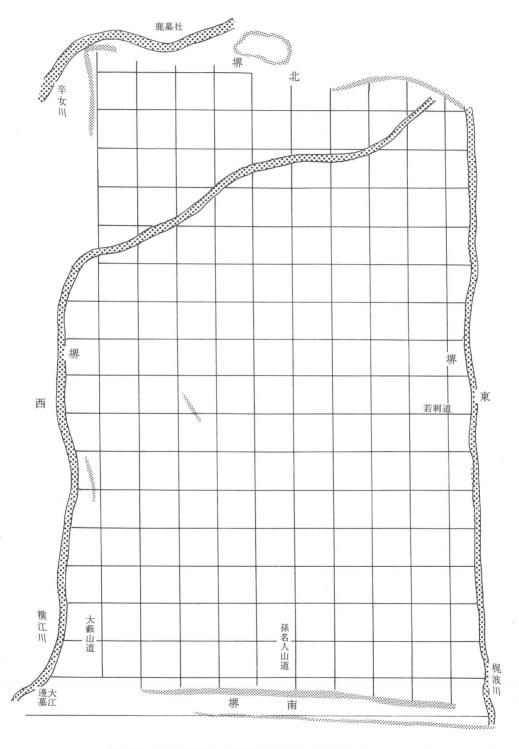
大荆荘に関する最も重要な資料は、東大寺正倉院に伝わる越中国新川郡大藪開田地図(天平 宝字3年(759))と越中国新川郡大荆村墾田幷野地図(神護景雲元年(767))である。

大藪開田地図には,条里の条数の記入はないが,条里の方眼を記す (第14図)。また西南端には大江辺墓,北に鹿墓社があり,東は梶波川が北流し,西は横江川が北流した後に東北流して荘域を横ぎることを示している。石原与作氏は,大江辺墓を富山県下最大の円墳である立山町浦田稚児塚古墳にあて,その荘域を復原した (第14図)。また鹿墓社の旧社地も推定地北に隣接したという。

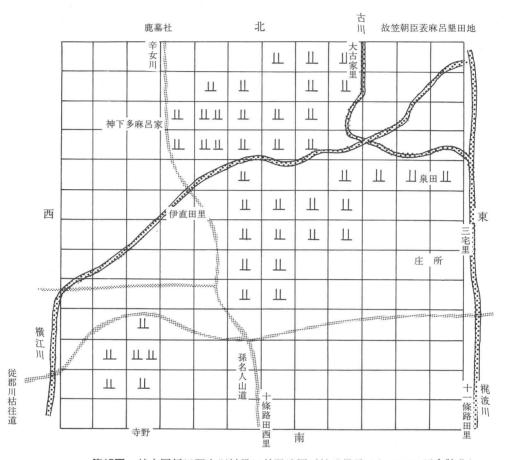
大荆村墾田幷野地図では、10条・11条の条数を記し、11条1行6・2行6の2町歩の区画に 荘家(庄所)のあることを示している。(第15図)。また荘域の西北には、在地の土豪と推定される神下多麻呂家があり、南北に孫名人山道が、東西に従郡川枯往道がのびている。南北の道は山に通じる道であり、東西の道は郡衙と川枯郷を結ぶ道であるという。なお石原与作氏は、東大寺領丈部荘図から、郡衙は上市町正印に、川枯郷は立山町利田横枕遺跡に比定した。また山については不明であるが、南約9kmの立山町上末窯付近を想像したいところである。このように当地区は、横江川と梶波川の水運ばかりでなく、陸路も十字に交差する交通の要地であった。なお南北の里数については、里外の地であり、南3里に及ぶという。

この大荆荘の荘域は、150町歩であり、神護景雲元年(767)の時点では、19町1反60歩が開田され、130町8反300歩が未開野地であると記されている。

越中には、東大寺領荘園約4,200町歩の約四分の一が所在し、大きな位置を占めていたが、周知のように長徳4年(998)には、「右件の郡々田は荒廃数多にして、熟田幾くならず」と記され(「諸国庄家田地目録」『平安遺文』巻2)、寛弘2年(1005)には東大寺勘納使が21年分の未納地子物を取り立てている。このように東大寺の初期荘園経営は大きくゆらぐが、東大寺



第14図 越中国新川郡大藪開田地図 (天平宝字3年(759),正倉院蔵)



第15図 越中国新川郡大荆村墾田幷野地国(神護景雲元年(767),正倉院蔵)

は以後も、その支配権を主張している。荘園絵図はそのための証拠書類であったらしい。

なお現在の地割には、方割地割の痕跡をほとんど留めていない(第16図)。ただし泉村・寺田の位置は、大荆村墾田幷野地図の泉田・寺野の位置とほぼ対応し、荘家比定地の蔵留に接して、乗田の小字名が残る。また荘域比定地西南隅には水口、東の境に古新川の小字名があり、かつての姿の痕跡と考えられる。

このような基礎的な研究に加えて、初期荘園がどのような体制下で開発されたのか、退転の実態はどのようなものであるのか、その歴史的役割をどのように評価するかなどについても、多くの研究がなされている。それらをここで網羅することはできないが、藤井一二氏の研究に従い、以下の点を列挙しておきたい。



第16図 大荆荘比定地付近の字名

- ① 東大寺の墾田所有は,造東大寺司の設置(天平20年(748)初出)と密接な関係があり, 当初は北陸を中心とし,後に他地域にも広まった。
- ② 墾田の獲得法には、勅施入、買得、豪族の施入の3種がある。勅施入が、本来の在り方であるが、経営のための諸物資の確保や、政治的な背景から、買得田と豪族の施入田が増加した。
- ③ 荘園の開発・経営は、郡司・地方豪族および新興の勢力(あわせて富豪層)に、依拠するところが多かった。

- ④ 荘域内の墾田・口分田を耕作する農民には、遠隔の本貫地から出向くものと、荘園付近に 進出した開墾型集落に住むものとがあった。また開墾型集落には、三世一身法や墾田永世私 財法の施行を契機として成立した I 類と、東大寺荘園の成立を契機としてそれとの関わりで 発展した II 類がある。
- ⑤ 初期荘園が9世紀中頃から10世紀にかけて衰退していく主因は、郡司より下位の村落首長を中心とする勢力が、自ら「所」を構成し、荘地を侵略したり、耕作を忌避するようになったからと考えられる。

2 遺跡分布調査の成果 (第17・18図, 第2表)

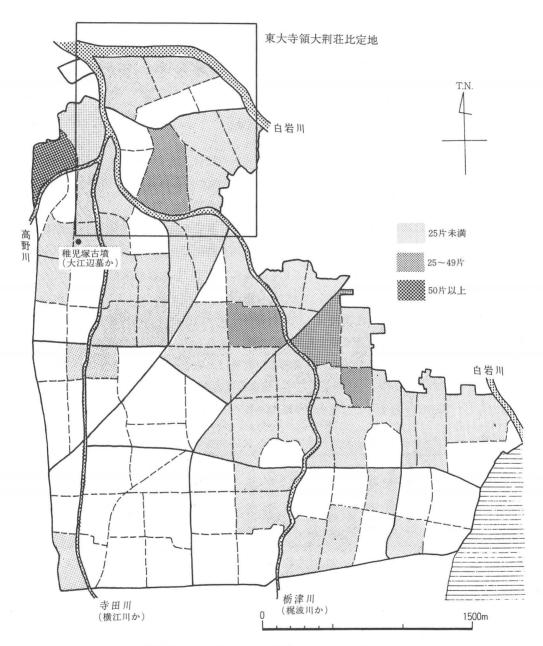
大荆荘比定地を含む常願寺川複合扇状地の扇端湧水地帯には、広くほぼくまなく古代の遺物が散布する(第17図・第2表)。この中に、散布が集中する地点が3個所あり、西から浦田遺跡、大荆荘比定地、辻地区の遺跡である(利田横枕遺跡は昨年度調査地区)。

採集した古代遺物には7世紀に比定できるものがなく、8世紀前半の資料は若干量が存在する。その八世紀前半代の遺物を採集できる地点が上記の3個所に一致することは興味深い。そして散布する遺物の大多数は8世紀後半~9世紀のものであり、以後は減少していく。ただし、全く遺物が散布しなくなるわけではなく、分散的に若干量が散布する。

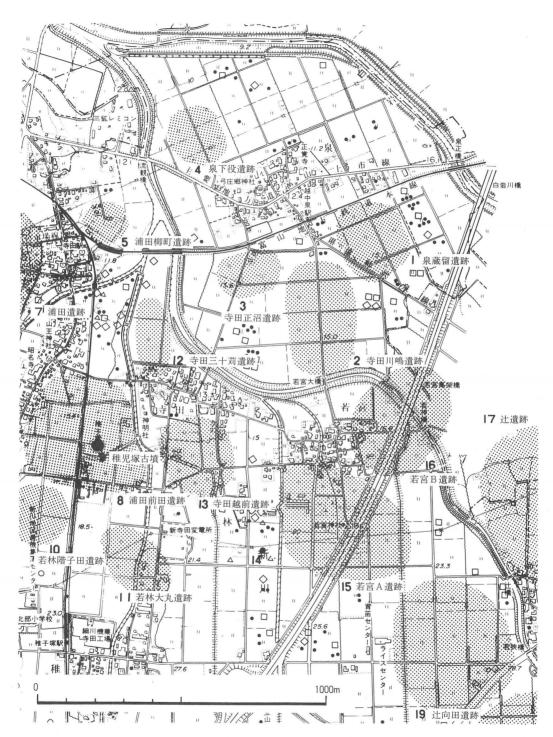
大荆荘比定地において設定した遺跡は、泉蔵留遺跡、泉下役遺跡、寺田川嶋遺跡、寺田正沼遺跡、寺田三十苅遺跡、寺田越前遺跡である(第18図)。これらのうち泉下役遺跡が、古代以後に成立したものであるのに対して、他の5遺跡は、断絶はあるものの、縄文ないし弥生時代以後、長く営まれている。その一つの理由として、後者の遺跡が旧河道に挟まれた微高地という、比較的安定した場所に立地することをあげうるであろう。ただし古代以前の散布量は少ない。

第2表 各遺跡の時代別遺物散布量(ゴチックが大荆荘比定地の遺跡、遺物破片数)

	遺 跡 名	泉蔵留遺跡	泉 下 役遺跡	寺田川嶋遺跡	寺田正沼遺跡	寺田三十苅遺跡	寺田越前遺跡	利田横枕遺跡	浦 田遺跡	浦田前田遺跡	浦田柳町遺跡	若林階子田遺跡	若林大丸遺跡	若 林 A遺跡	若 林 B遺跡	辻 遺跡	辻 向 田遺跡	辻 宮 下遺跡	高原橋場遺跡	高原諏訪遺跡	高原下大門遺跡	高原念仏塚遺跡	高原早稲田遺跡
縄	文			2		1		22	1	4		1	62				3	13	15	2	177	6	
弥生	一古墳	5		4	6	3	7	6	34	24	1	2		4	3	79	19	7	7	15	8		5
古	代	24	1	10	31	2	4	72	52	7	2	2	1	10	1	35	37	60	33	31	4		5
中	世	12	2	3	21	2	10	12	11	58	4	2	5	18	16	30	15	49	29	7	11		1
近	世	11	12	6	29	2	19	8	9	26	3	2	3	16	9	21	32	38	61	.39	17	105	10



第17図 古代遺物の散布状態と東大寺領大荆荘比定地



第18図 大荆荘比定地付近の古代遺跡

また大荆荘比定地に近接する遺跡として、浦田遺跡、浦田柳町遺跡、浦田前田遺跡、若宮 A 遺跡、若林階子田遺跡、若林大丸遺跡、辻遺跡、辻向田遺跡をはじめ、多数の遺跡を設定できた。これらの遺跡は、少なくとも8世紀末~9世紀にかけては並存し、当時の賑わいをうかがうことができる。

なお従来の調査によって、大荆荘比定地の南方約9kmに位置する立山町上末窯(須恵器窯)が8世紀後半~10世紀中頃と、大荆荘に一致する期間、操業していたこと及び、開発は扇端部にとどまらず、峡谷氾濫原や若干であるが扇央部にかけて及びつつあったことなどが判明している。

3 東大寺領大荆荘をめぐって

以上の分布調査の所見は、従来の見解と一致するところと、やや相違する点とがある。確実な考古学の所見は、発掘調査例の蓄積をまたなければならないが、現在の時点において考え得たことを示しておきたい。

(a) 荘域の比定について

大荆荘比定地において、遺物がほとんど散布しない帯状の地区を認めることができ、この地区は旧河道と推定できる(第17図)。現在の寺田川が、かつて荘域比定地西側から、この旧河道に沿って流れていたとするならば、大藪開田地図の横江川と一致する(第14図)。また砺津川は現在、西北流するが、かつて北流したと考えるならば、同絵図の梶波川に合致する。このように旧河道を、絵図にあわせて解釈できる地点は、付近に存在しない。

遺跡の位置と、大荆村墾田幷野地図とを対比するならば、遺跡は野地と記されている部分に位置することが判る(第15図)。また遺跡は、従郡川枯往道と孫名人山道という十字に交差する道に沿うと考えられる。そして同絵図において、庄所とされる地区が泉蔵留遺跡に、神下多麻呂家と記す地区が泉下役遺跡に一致する。

このように、従来の荘域の比定と、遺跡分布調査による所見とはよく一致し、その比定はお そらく間違いないものと考える。

(b) 開発の契機について

常願寺川扇状地扇端部は、縄文・弥生時代以来、多数の遺跡が営まれたが、6世紀にはこれが減少し、確実に7世紀と認定できる資料は1点も採集できなかった。8世紀初めの頃、当地は、農業生産の潜在力に富むにもかかわらず、広大な野地(大藪)となっていたであろう。

8世紀前半になると、浦田遺跡、大荆荘比定地、辻遺跡と、3個所で小規模ながら、集落が営まれるようになったらしい。その開発の開始が、8世紀初頭であるか、同第Ⅱ四半期であるかについては、分布調査のみでは判定しにくいが、8世紀初頭に遡る資料もごくわずかであるが存在する。すなわちこれらの集落は、藤井一二氏が開墾型集落Ⅰ類とする、三世一身法・墾田永世私財法を契機として在地有力者が開発した村にあたるものであった可能性が高いもので

あるが、それ以前に若干の人の居住が始ったらしい。これらの集落は、以後と比べると著しく 小規模なものであったろうが、初期荘園が当地に設定される背景を考えるには見逃せないもの である。

大荆荘が設置される8世紀中頃以後,特に8世紀末~9世紀にかけて,当地域には常願寺川扇端遺跡群ともいうべき,大遺跡群が形成された。その範囲は,大荆荘域よりも,はるかに広大であり,大荆荘150町歩を開墾するために集められたものとは考え難い。

当地区に初期荘園が置かれた意義は、むしろ荘域以外の開発が、おそらくは大荆荘と深くかかわりながら急速に進展したことにあると考えられる。この意味で、これらの集落は、藤井一二氏のいう開墾型集落 II 類にあたるであろう。このことを可能としたものの一つは治水・用水網の整備というような技術の導入であったかもしれない。大荆荘に先行する 3 遺跡のうち、大荆荘は最も不安定な地に立地し、荘域が維持されることは、当地域全体が維持されることにつながったであろう。

またこの頃、大荆荘と密接な関係をもちながら、立山町上末窯が創業された。窯業を営むには、粘土の採掘と燃料の採取という権益が必要であり、従来は上市町の新川郡衙周辺においておこなわれていた。このことから東大寺領大荆荘は、手工業生産を管掌し、山野の用益権にまで関与していた可能性が高いと考える。

このように東大寺領大荆荘の荘家は、荘域の開発と維持ばかりでなく、当地域の郡衙的な役割を荷っていたように見える。東大寺には国家的機関という側面と、私的権門という側面とがあり、その評価は難しいところがあるが、8世紀中頃における窯場の移動という現象は、北陸において広くみることができ、国家体制の大きな転換のはしりが表われたものと考えたい。

このように当地域の開発は、8世紀前半と8世紀中頃の二つの契機を経て急速に進行した。

(c) 荘園絵図の理念と実像

絵図とは、客観的な地図ではなく、製作者の権利の主張を含む理念の表現とみてよいであろう。それに対して考古資料はその実態を反映し、私達はこの二者を対比することによって多くのことを知ることができる。

大荆村墾田幷野地図をみると、庄所と神下多麻呂家があり、それぞれ泉蔵留遺跡と、泉下役遺跡とにあたるらしい(第15・18図)。他方、寺田川嶋遺跡、寺田正沼遺跡、寺田三十苅遺跡は絵図に記されず、寺野となっている。

神家多麻呂家にあたる地区は、荘域調査区の中でも、最も低湿な地区であり、大荆荘成立時にはじめて人が居住しはじめたところである。また遺物採集量も少ない。それに対して寺田地区の遺跡は微高地上に立地し、縄文・弥生時代以来の遺物が若干量散布する。また寺田川嶋遺跡では8世紀前半の資料を採集している。

このように荘園絵図には、新しく劣悪な環境に住んだ人のみを記し、従来の集落は野地として扱っている。神護景雲元年(767)において荘域150町歩のうち、未墾野地は130町8反300歩

にのぼるというが、そのかなりは大藪ではなく、在地の人々の集落およびその墾田であったと推察される。荘域開発をはばむものは、財力や労働力の不足ではなく、立ちのき問題であったのかもしれない。同時に荘家に近接して、荘域内に集落が存続したことは、そこに住む人々が荘園経営において一定の役割を荷っていたことを示すとも考えられる。

このように絵図においては、東大寺の一円支配が表現され、東大寺の荘園維持のてことなるが、その実態はかなり複雑なものがあったと推察できる。

(b) 大荆荘の衰退

9世紀中頃から10世紀にかけて、東大寺の荘園経営が難しくなってきたことが知られているが、当地域の遺物散布量も9世紀末頃から減少していく。そしてこの現象は、大荆荘比定地のみではなく、常願寺川扇端部全体で生じたことが重要と考える。

このことの最も簡単な解釈は、河川の氾濫等の理由で当地域一帯が衰退したというものであるう。ただし7世紀とは異なり、若干量の遺物が分散的に散布している。

先に絵図に現われない考古学の所見について示したが、逆に分布調査で遺跡と認定しなかった地区は水田であった。遺物散布量の多少によって設定した遺跡は、おもに集落であった可能性が高いことを認識しておかなければならない。そして集落に関しても、集村であるならば判りやすいが、現在も付近に存続する散居村的景観の場合には、遺跡の設定が難しいであろう。

採集資料をみるならば、大剌荘の衰退期以後、中世にかけて、散布が分散化する傾向がある。おそらくは大荆荘を核とする集村的な体制に基づく開発を基盤として、小規模分散型の体制に転換していったのであろう。そして集落構造の転換は越中にとどまらずかなり広汎に生じたことと、初期荘園と郡衙の衰退期がほぼ一致することから、この現象は社会そのものの大きな変化の表われであったとみなしたい。

結び

以上のように、当地区においてはじめて考古学的な調査を実施した結果、東大寺領大荆荘の 沿革と、当地域全体の動向とについていくつかの知見を加えることができた。最後にこれらを 簡単にまとめておこう。

- ① 大荆荘設置に先行して、常願寺川扇状地扇端部の3個所において、ごく小規模な開発が始まった。
- ② 大荆荘は上記3個所のうち、立地が最も不安定であった地区に設定された。
- ③ 大荆荘設置以後、常願寺川扇端部に大遺跡群が成立した。
- ④ 大荆村墾田幷野地図で、野地とされるところに集落が存在した。
- ⑤ 大荆村墾田幷野地図で、神下多麻呂家とされる地点は、新しく人が居住しだした低湿なところであり、荘園経営において特に積極的な役割を果たした人物の居所と推定できる。
- ⑥ 9世紀末以後、荘域にとどまらず、常願寺川扇端一帯で遺物の散布量が減少するが、それ

は地域の衰退ではなく、集中型から分散型へという集落景観の変化を反映している可能性が 高い。

なお⑥の現象について個人的な歴史観を示すならば、個人支配を原則とする律令国家から、 土地支配を重視する王朝国家への転換の一つの表われであったと考える。集村形態は、構成員 の掌握や軍事的な面では有利であるが、開発が一定水準に達して以後は、農業生産活動に不便 を強いるものである。土地支配とそれにもとづく徴税を重視するならば、人々を集住させるよ りも、より自由に開発と生産をおこなわせる方が合理的であったろう。逆にこのことは中世後 期に再び集村化が進行することの意味を問うものである。

なお、初期荘園の開発の在り方は、勅施入と豪族施入というような個々の条件によって、多様な形態があったと推察できる。その比較検討は今後の課題であるが、9世紀を境として広く生じた大きな変化をつなぐものが初期荘園であったと考える。

[注]

- ① 石原与作「古代の荘園と条里」『立山町史』1977年A図をもとに第14図を作成した。
- ② 前揭注①石原論考。
- ③ 前掲注①石原論考のB図と下記論考から第15図を作成した。 藤井一二『初期荘園史の研究』1986年,図7。 藤井一二「国指定史跡*じょうべのま遺跡_{*}と寺領荘園」『日本海地域史研究』第8輯,1988年,図4。
- ④ 前掲注③藤井論考。
- ⑤ 前揭注①石原論考。
- ⑥ 藤井一二『初期荘園史の研究』1986年。
- ⑦ 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年。
- ⑧ 坂井秀弥「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』18,1985年。 広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』第6巻変化と画期,1986年。

第5章 おわりに

1988年度の分布調査によって2517片・口縁部31.0個体分の遺物を採集し、4個年の採集遺物は11566片・204.2個体分に達した。また遺跡数は30遺跡を加え、105遺跡となった。

本年度調査地区は、1987年度調査地区と同じく、常願寺川扇状地扇端部を中心とする地帯であり、採集品も相似た傾向をもつものであった。また本年度は、富山県下最大の円墳である立山町浦田稚児塚古墳の測量調査と、東大寺領大荆荘比定地の分布調査を実施した結果、多くの知見を得ることができた。その成果については前章までにできる限りの考察を加えて示したが、最後にこれらを簡単にまとめておきたい。

本年度調査地区では従来10遺跡が知られていたが、分布調査の結果20遺跡を加え、30遺跡となった。また数が増したばかりでなく、それぞれの遺跡についても、長期にわたるものが多いことが判明してきた。そして遺跡の存続期間にはいくつかの型があり、遺跡の立地する地形と密接な関係をもつと推定できた。

扇状地扇端部における人の居住は縄文時代中期初めに本格化するが、この時期以後、近代に 至るまで連綿と営まれるものが第1型である。この型は高原地区という、扇端高位で上段段丘 に隣接する地区に顕著である。この地区は、扇端の他の地区に比べ安全であると同時に、栃津 川・白岩川という中規模河川が流れ、狩猟・採集民にとっても、農耕民にとっても、良好な居 住地となったのであろう。

第2型は、弥生時代にはじまり近代まで続くものである。浦田・泉・寺田・辻地区という、 第1型より低位の扇端部微高地に立地する。この地区には縄文時代遺物は存在してもごく少量 であり、弥生中期初め以後、特に後期後半以後に散布量が増加する。第2型の地区は稲作に特 に適しているためか、弥生時代~中世においては、当地域で最も多くの遺物が散布する。

第3型は、古代以後、特に8世紀初め以後にはじまり、近代に至るものである。本年度調査 区では北端デルタ内の低湿な地域であり、1986年度調査の峡谷氾濫原もこれに含まれる。遺物 散布量は少ないが、開発の全体像を知る上で重要である。

第4型は、縄文時代遺物が散布して後、空白期間を経て再開発される遺跡である。扇状地のやや扇央寄りの地区と、中・上位の河岸段丘面に立地する。再開発の時期には古代・中世・近世の3種があるらしい。これらは初期の農業技術では稲作をおこないにくい地域であるが、面積は広大であり、どのように再開発が進行したかを明らかにすることには大きな意味がある。

他方,常願寺川扇状地扇端部にほとんど遺物が散布しない時期のあることも判明してきた。 その期間は,弥生前期,7世紀,16世紀である。これらは,それぞれ稲作の開始,初期荘園の成立,城館の築造という問題を考える上で興味深い知見となるものである。 以上のような成果をふまえて、今後の発掘調査の所見を増せば、立山町は地域開発史研究の モデル・ケースとなり得るであろう。

なお来年度は、扇央部の分布調査を実施する予定である。その多くは第4型と推定できるが、 本年度調査地区の大祖里神社前遺跡・野町遺跡のように、高位に立地しながら存続期間の長い 川沿いの遺跡もあり、慎重な調査を実施したい。 (字野隆夫)



(1988年撮影, 縮尺 1/20,000, 第3・4 図参照)



(1969年撮影, 縮尺 1/20,000, 第3・4図参照)

図版三 稚児塚古墳航空写真 (富山県公文書館提供)



1 墳 丘(西から)



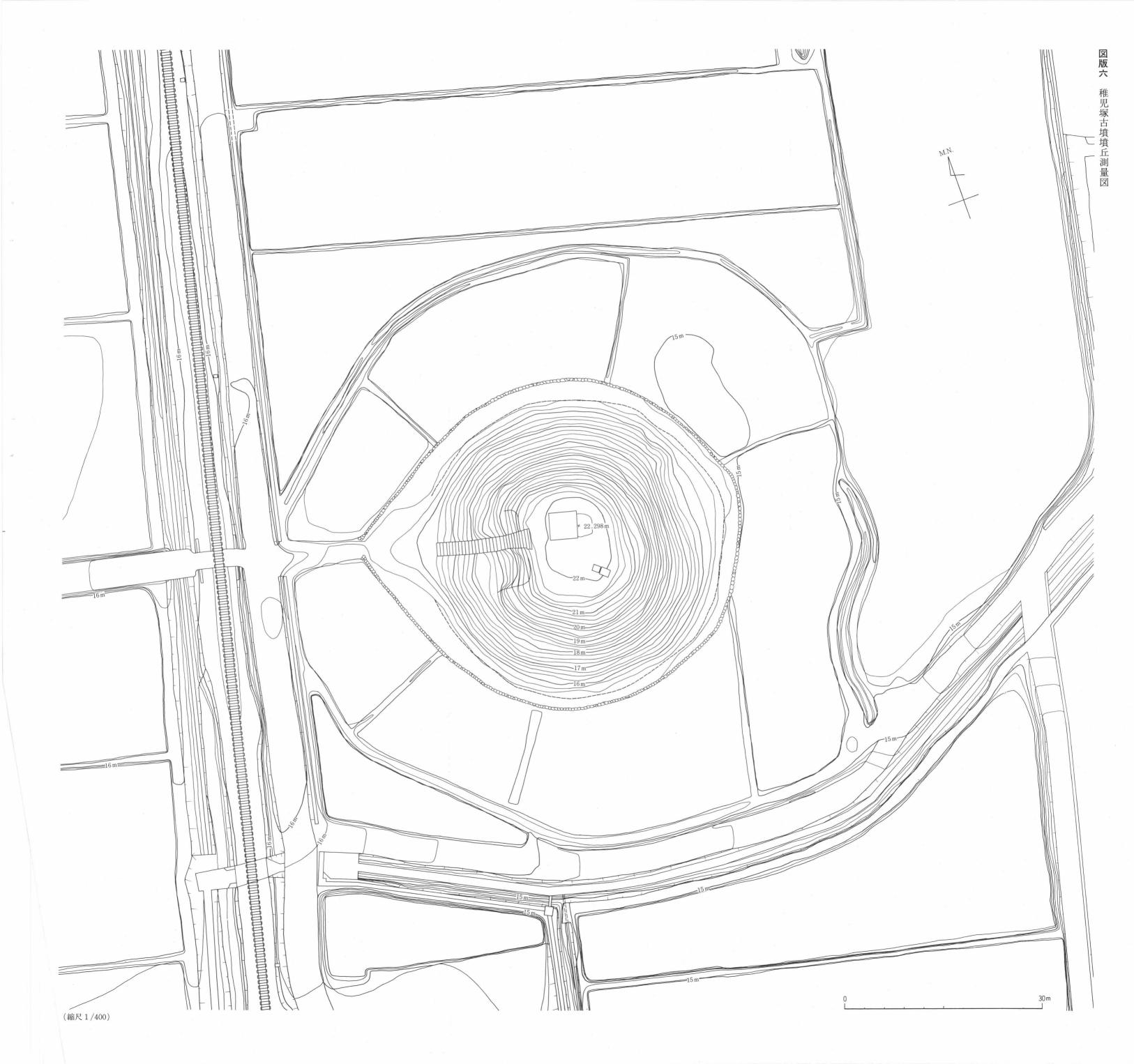
2 墳 丘(北から)

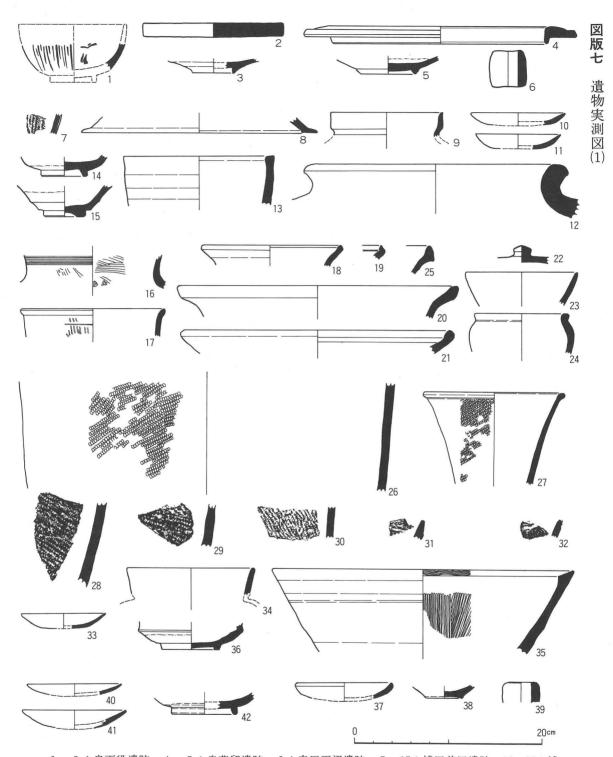


1 墳 丘(東から)

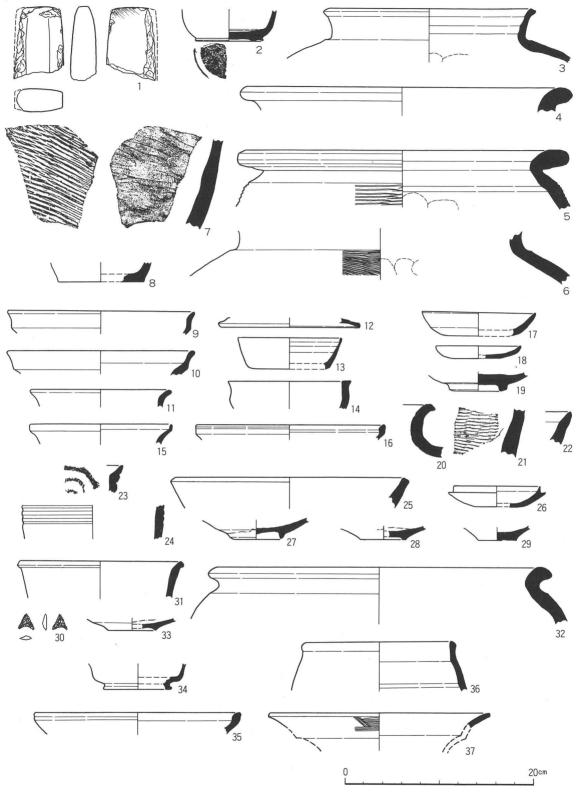


2 墳 丘(南から)

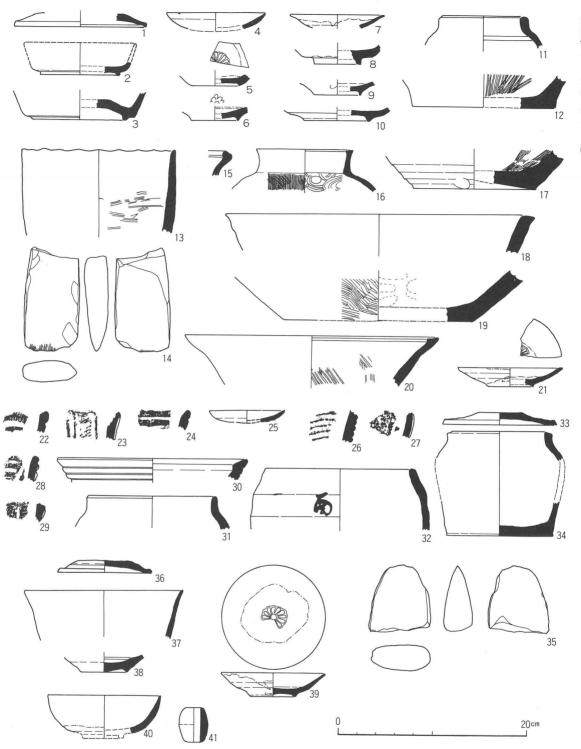




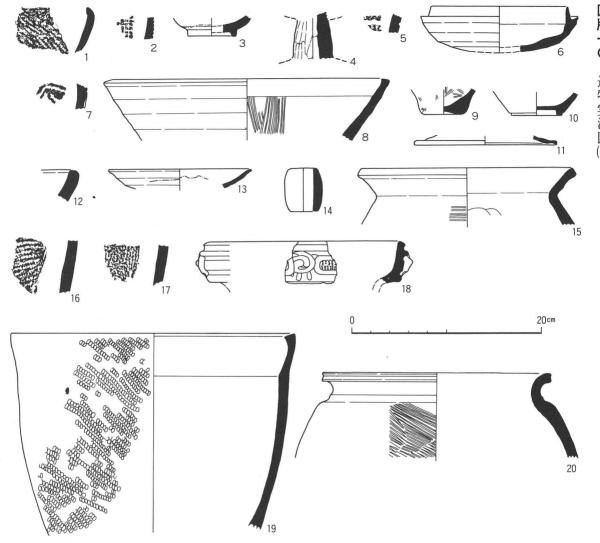
 $1\sim3$:泉下役遺跡, $4\cdot5$:泉蔵留遺跡,6:寺田正沼遺跡, $7\sim15$:浦田前田遺跡, $16\sim25$:浦田遺跡, $26\sim31$:若林大丸遺跡,32:寺田三十苅遺跡,33:若林階子田遺跡, $34\sim36$:寺田越前遺跡, $37\sim41$:若宮B遺跡,42:若宮A遺跡(縮尺1/4,図版11参照)



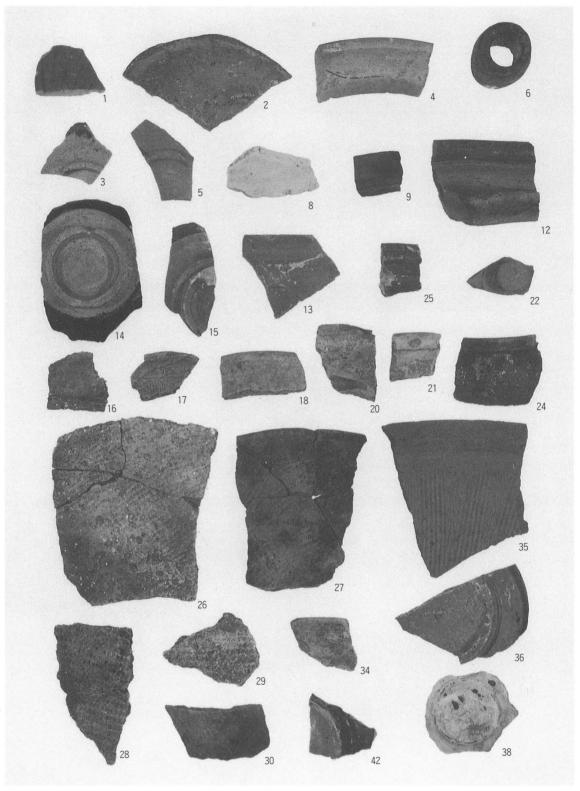
1~8:若宮遺跡林氏採集品,9~22:辻遺跡,23~29:辻向田遺跡,30~33:高原橋場遺跡,34·35:野口新亀沢遺跡,36:高原早稲田遺跡,37:8八地区(縮尺1/4,図版12参照)



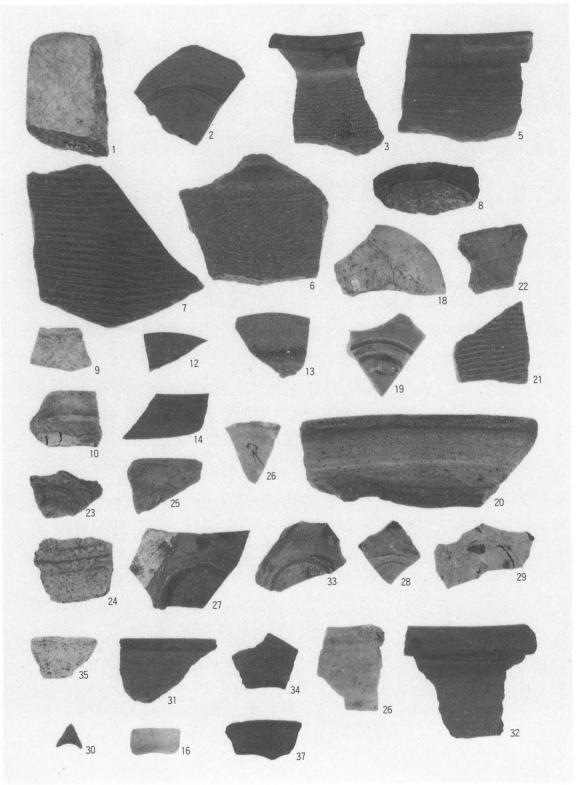
 $1\sim12$:高原諏訪遺跡, $13\sim21$:辻宮下遺跡, $22\sim25$:高原下大門遺跡, $26\sim35$:高原念仏塚遺跡, $36\sim38$:下女川新遺跡,39:14八地区, $40\cdot41:14$ 二地区(縮尺 1/4 , 図版13参照)



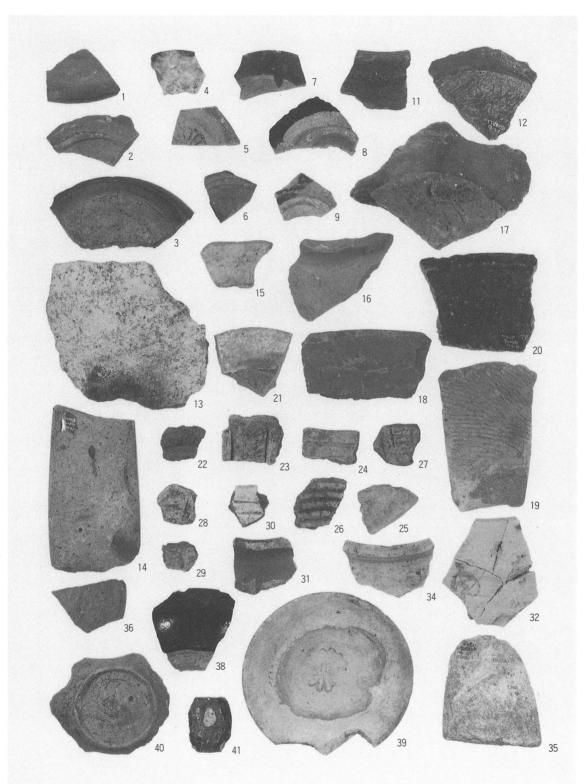
 $1\sim3$:上女川新遺跡,4:野町遺跡, $5\cdot6$:大祖里神社前遺跡, $7\cdot8$:16二地区, $9\cdot10$:稚児塚古墳周濠,11:17口地区, $12\cdot13$:17へ地区,14:18口地区,15:147 地区, $16\sim18$:地区外二ッ塚付近,19:若林大丸遺跡追加資料,20:若宮B遺跡追加資料(縮尺 1/4 ,図版14参照)



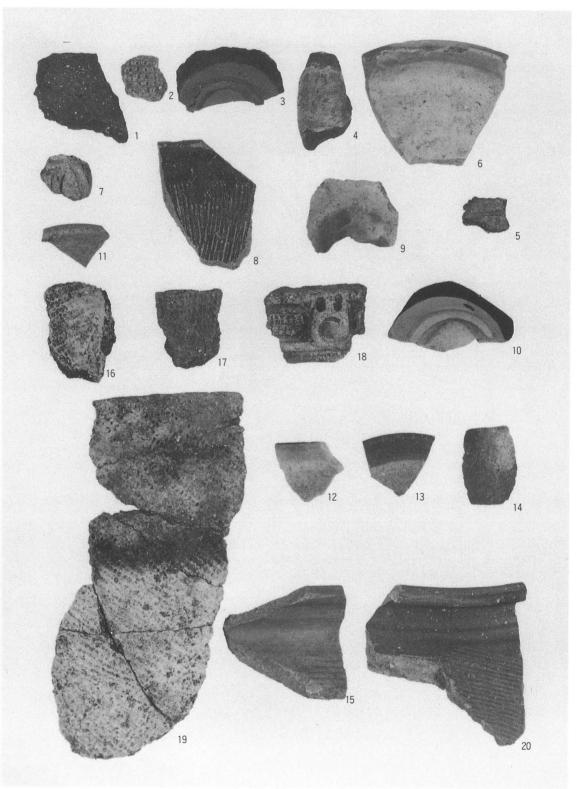
(図版7参照)



(図版8参照)



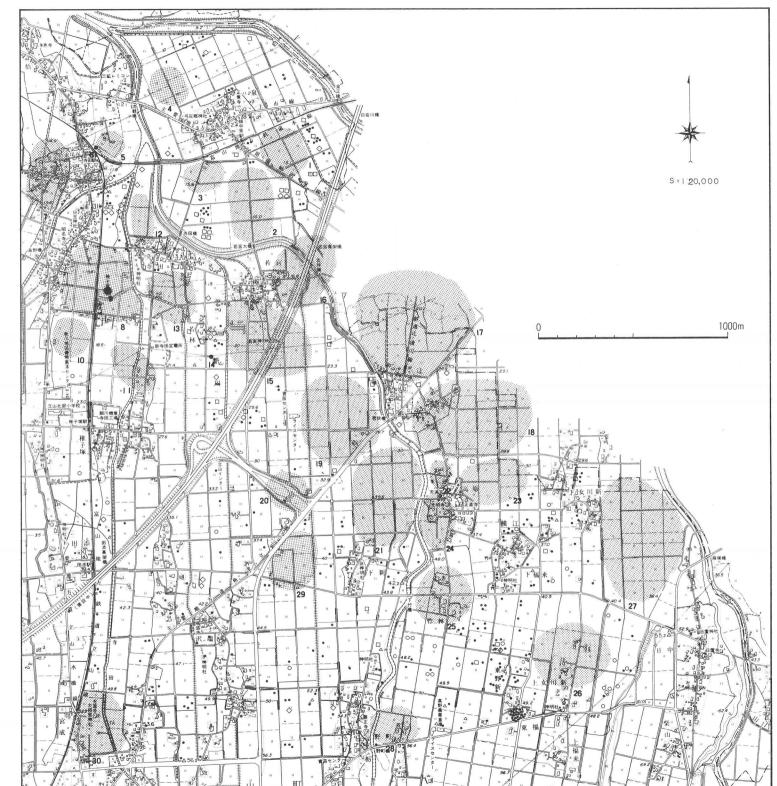
(図版9参照)



(図版10参照)

- (1) 泉蔵留遺跡(弥生時代~近世)
- (2) 寺田川嶋遺跡(縄文時代~近世)
- (3) 寺田正沼遺跡(弥生時代~近世)
- (4) 泉下役遺跡(古代~近世)
- (5) 浦田柳町遺跡(弥生時代~近世)
- (6) 大明神経塚(中世)
- (7) 浦田遺跡 (縄文時代~近世)
- (8) 浦田前田遺跡(縄文時代~近世)
- (9) 稚児塚古墳(古墳時代)
- (10) 若林階子田遺跡 (縄文時代~近世)
- (11) 若林大丸遺跡 (縄文時代~近世)
- (12) 寺田三十苅遺跡(弥生時代~近世)
- (13) 寺田越前遺跡(弥生時代~近世)
- (14) 若林経塚(中世)
- (15) 若宮A遺跡(縄文時代~近世)
- (16) 若宮B遺跡(縄文時代~近世)
- (17) 辻遺跡(弥生時代~近世)
- (18) 辻宮下遺跡(縄文時代~近世)
- (19) 辻向田遺跡 (縄文時代~近世)
- (20) 辻坂の上遺跡 (縄文時代~近世か)
- (21) 高原橋場遺跡(縄文時代~近世)
- (22) 高原早稲田遺跡(弥生時代~近世)
- (23) 高原諏訪遺跡(縄文時代~近世)
- (24) 高原念仏塚遺跡 (縄文時代~近世)
- (25) 高原下大門遺跡(縄文時代~近世)
- (26) 上女川新遺跡(縄文時代~近世)
- (27) 下女川新遺跡(縄文時代~近世)
- (28) 野町遺跡(縄文時代~近世)
- (29) 野口新亀沢遺跡(縄文時代~近世)
- (30) 大祖里神社前遺跡 (縄文時代~近世)

(○:縄文時代遺物採集地点,△:弥生·古墳時 代遺物採集地点,□:古代遺物採集地点,◇: 中世遺物採集地点,●:近世遺物採集地点)



1989年3月25日 印刷 1989年3月31日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ 立山町埋蔵文化財調査報告書第8冊

編集·発行 立 山 町 教 育 委 員 会 富山大学人文学部考古学研究室

印刷 ヨシダ印刷株式会社

